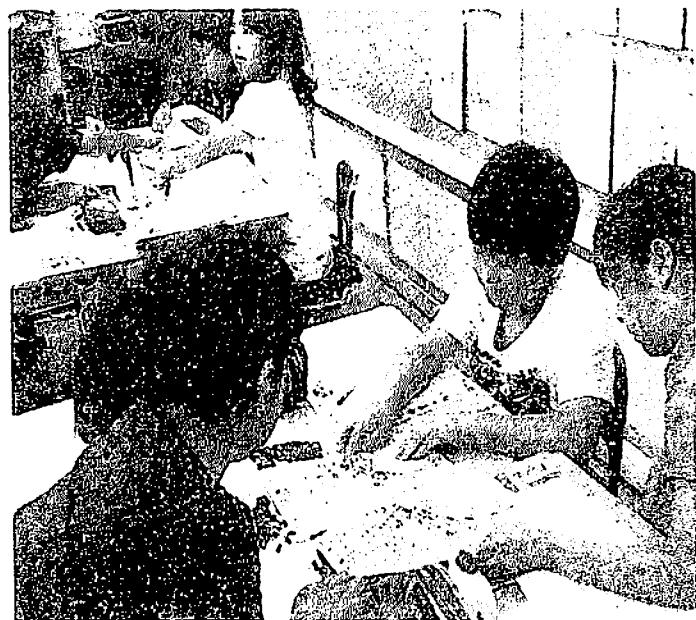
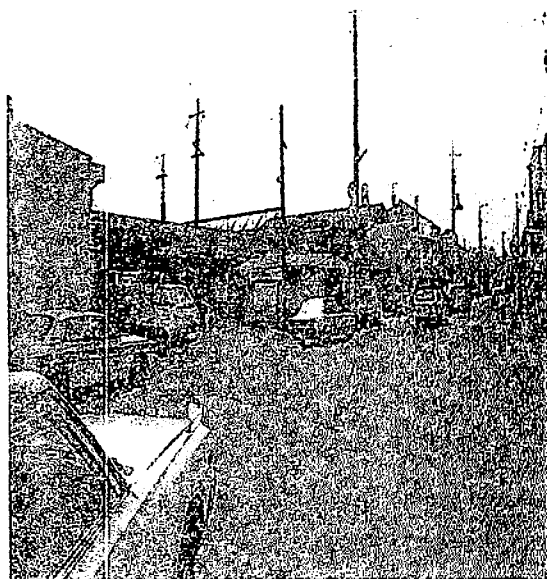


市の様子を理解を深める社会科学習の在り方

～四街道市の土地利用の移り変わりを通して～



研究のきっかけ

本学級の児童は3年生となり、初めての社会科の学習で、学校の周りの様子を学習している時のことである。1人の児童が、「おばあちゃんが、四街道小学校は昔違う場所にあったって言うていた。」と発言した。周りの児童は、「本当にそうなのかな。」「学校は動かせないよ。」などと言いながら不思議そうにしていた。そこで、「四街道小学校が昔どこにあったのか調べてみると面白いね。」と児童に話をした。約100年前まで四街道小学校は、学区にある高等学校の近くにあった。このことから、多くの児童が四街道市の様子はずっと変わっていないと捉えていることが分かり、市の様子の学習の際に、昔の様子について取り上げてみようと考えた。

1 研究主題

市の様子の理解を深める社会科学習の在り方
～四街道市の土地利用の移り変わりを通して～

2 主題設定の理由

(1) 現代社会の要請から

児童が生きるこれからの時代は、知識基盤社会と言われ、社会的変化が人間の予測を超えて進展するようになってきている。このような予測困難な時代に、これから発達する人工知能などは第四次産業革命といわれている。第四次産業革命の時代には、判断の根拠や理由を明確に示しながら自分の考えを述べたり、資料から社会的事象を多面的・多角的に考察して表現したりすることが今まで以上に必要となる。歴史的に考えたとき、産業革命は幾度となく繰り返されている。そして、その大改革の中で社会や人々のために活躍した人たちがいた。先人の生き方や考え方を学ぶことは、現代に生きる児童の未来にも大いに活かせるはずである。市の様子の移り変わりは、地域社会でその時代に生きる人々がより良い生活のために工夫してきた知恵である。市の様子について、「移り変わり」も学ぶことで児童がこれからのより良い地域社会、日本、世界の創り手になると考える。

(2) 学習指導要領から（平成29年告示）

本単元は、学習指導要領第3学年の目標及び内容を受けて設定している。（資料1）

社会科の教育目標は、「公民としての資質・能力」の育成を目指している。「公民としての資質・能力」とは、「広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な資質・能力」と講じられている。「有為な形成者」とは、中学校・高等学校への接続・発展を意図しており、「広い視野」「グローバル化」は、国際社会の社会的事象を多角的・多面的に捉えることである。中でも、国際社会の社会的事象を多角的・多面的に捉え考えることは、地理的環境や産業の様子、先人たちの生き方や考え方を理解した上でなら、新たな考えも導きやすくなるのではないかと考える。

学習指導要領における学習内容は、内容（1）身近な地域や市区町村の様子について、学年の導入で扱うこととし、「自分たちの市」に重点を置くことが明記された。また内容（4）から、市や人々の様子について、交通や公共施設、土地の利用や人口、生活の道具などの違いに着目することになっている。このことから、市の様子を、「土地の利用」の視点を入れた移り変わりについて学ぶことで、理解を深めることができると考えた。

(3) 印教研研究主題から

よりよい社会の実現に寄与する「生きる力」を培う社会科学習 ～自ら課題を見出し、自らの考えを実現できる児童生徒の育成をめざして～

本研究は、印教研研究主題を受けて設定している。副題にある「自ら課題を見出し、自らの考えを表現できる児童生徒」を育成するためには、社会科の学習が始まる3学年の段階で、資料などから社会的事象を正しく捉え、比較・分類し、表現することが必要だと考えた。児童にとって本研究が、社会的事象から課題を見つけ、課題に対しての解決・改善への創造力につながり、これからの未来を創る資質・能力の素地になると考える。

(4) 児童の実態から(3年2組 36名)

本学級は、社会科の学習に興味をもっている児童が概ね多い。本単元の学習内容に関する事前調査では、四街道市が好きな児童が多いことが分かったが、四街道市で好きな場所について、他の市にある場所や「ない」と答える児童がいた。「市」という地域社会の領域がどこまでか認識できていなかったり、四街道市に魅力的な場所がないと感じていたりしていることが分かる。また、建物などが変化しないなどから、四街道市を自慢に思えない、四街道市にずっとは住んでいくたくないと思っている児童が、全体の4分の1程度いた。

四街道市の土地の様子については、学区にある建物は多いと感じているが、田畑など、土地利用で多いものを「少ない」と感じている児童が多いことが分かった。さらに、市役所や駅など市内で数少ない場所でも、「身近な場所にある」「何度か行ったことがある」という感覚から「多い」と感じている児童も少なくなかった。

自分が住む市の理解が不十分であり、その結果、市のことを誇りに思えない児童が多いことやこれからの四街道市の様子が変わらないと感じている児童がいたことから、市の様子について、その時代に生きる人々の知恵と工夫によって移り変わってきたことを知りながら、各地域を調べることに意味があると考え、本主題を設定した。

3 主題について

本単元において、「市の様子を理解を深める」とは、市の移り変わりを知ることで自ら土地の利用のされ方に気づくことと捉えられる。

この単元は、学区の学習とは違い、市全体の様子を見学することが難しく、副読本を活用しながら学習することが通常の流れである。そうすると以下の課題が出てくる。

- ・「市」の概念が児童の中で大きいため、地図を詳細に作れず、学習が大まかな特徴を捉えるまでとなる。そのため、市の様子を理解が薄いままになってしまっている。
- ・地図の見方・考え方の導入単元であるが、取り上げる地域の地図が少ないまま地図記号などを学習するため、定着し切らないままである。その後の学年で地図の読み取りの際、地図記号からの視点が曖昧になっている。
- ・土地の高低の視点は体験的に学習することが難しく、自ら気づいたことと比べると理解が薄くなる。

そこで、市の様子について、地域の特徴を細分化しながら、土地利用の移り変わりの視点に気づくことができれば、理解もより深まり、地図の見方・考え方や地図作りについてもさらなる工夫がみられるのではないかと考えた。

4 単元で付けたい資質・能力

① 地図の見方・考え方の深まり

市の様子を理解するには、児童が最初に出会う資料となる地図の見方・考え方を深める必要があると考える。地図の見方・考え方が習熟すると、その後の学習で資料の読み取り方が深まり、事象と事象、事象と自分を結びつけて考える力が養われ、国際社会の社会的事象を多角的・多面的に捉える思考力の基礎を育むこととなる。

② 歴史的背景への関心の高まり

市の様子の変り変わりを知ることで、児童の中に「歴史」という視点が入る。現在の市の様子は、地域社会に住む先人の知恵や努力の上に成り立っているという歴史的背景への関心を持たせたいと考えた。このことは、昔の道具を知り、人々の生活を学ぶ単元と変わらないものと捉えている。「歴史」という視点を加えた本単元は、これからの社会科を学んでいくために重要であり、いずれは地域社会に対する誇りと愛情を育てることにつながる。また、地域を知る視点を育てることは国際社会を見る視点につながる。つまり、社会的事象を見る力の素地を育成することとなる。

5 研究の目標

自分たちが住んでいる市の様子を理解を深めるために、市の様子学習において、土地利用の移り変わりを通して考えることの有効性を明らかにする。

6 研究の内容と方法

【研究内容】

市の様子を理解を深めるために、土地利用の移り変わりを知ることの有効性

過去と現在の様子を観察し比較することでの市の歴史的背景への関心の変容

【研究方法】

・実態調査の変容から考察する。
・評価基準を設け、ノート記述から分析する。

・実態調査の変容から考察する。

7 研究の仮説と手立て

【仮説1】

市について調べる際に、教材やまとめ方を工夫すれば、地図の見方・考え方が多面的になり、市の様子を理解を深めることができるだろう。

手立て① 市の様子を細分化し、各地域の地図の移り変わりを調べる。

本単元の課題は、取り上げる地域の地図が少ないまま地図記号を学習することにある。地域の理解を深める学習について、先行研究である平成23年度安部教諭の提案に「手順を踏んで様々な資料に触れて学習すれば、より理解が深まったと思われる。」と記載されていた。このことから、四街道市の様子を細分化し、8ヶ所の様子を1時間ずつ学習することにする。各地域を学習する際には、その地域の昔と現在の地図を比較する。昔と現在の地図を比較すると、事象を多面的に捉えることができ、市の様子への理解が深まるのではないかと考える。

手立て② 各地域の特徴を学習した後、市全体の様子をまとめる。

学区の学習の次に四街道市の様子を調べることを知らせ、市のマップを作成することにする。単元のまとめで、各地域の特徴を書いたマップを見ながら話し合い、市の様子をまとめる。市の様子をまとめる際に、具体的な特徴が視覚化されているため、根拠となる理由を基に話し合うことで、意見が出やすくなる。また、特徴に焦点を当てて、グループ化や共通点を探すことで、関連していることに気づきやすくなる。マップを使って視覚化したものが、各地域の土地利用の根拠となり、市の様子の理解を深めることになると考える。

【仮説2】

過去と現在の様子を観察し比較すると、地域の歴史的背景に関心を持ち、市の様子を見る視点が広がるだろう。

手立て① 各地域の昔と現在の特徴が分かる資料を活用する。

導入では、学区の学習に関連させて、学区にある場所の昔の写真を提示し、現在のどこなのか予想させる。その後、グループに地図を配り、話し合いながら現在の写真で確認するような流れで学習していく。また、昔と現在の土地利用や人々の様子がわかる写真を提示することで、「こういう場所があったから、今こうなったのか」や「こんな人たちがいたから、今こうなったのか」など、市の歴史的背景に関心を持ち、市の土地利用の移り変わりを理解することができる。各地域の特徴を調べる際も、昔と現在の資料を活用し、学習を進めていく。

手立て② 市の様子の移り変わりを知る方をゲストティーチャーとして招く。

市のマップを作成した後、毎時間の学習で提示した写真を見て、当時の人々の生活は、どんな生活をしていたのかを予想する。その後、四街道市の歴史を知る方をゲストティーチャーとして招き、児童の予想に答えてもらいながら、四街道市の人々の生活や土地利用の移り変わりを学ぶ。自分の住む市が移り変わってきたことを聞くことで、市の歴史的背景への関心が高まると考える。尚、児童の実態を配慮し、「昔」という概念は、児童の祖父母が子どもの頃を指し、具体的には、昭和30年から40年までとする。

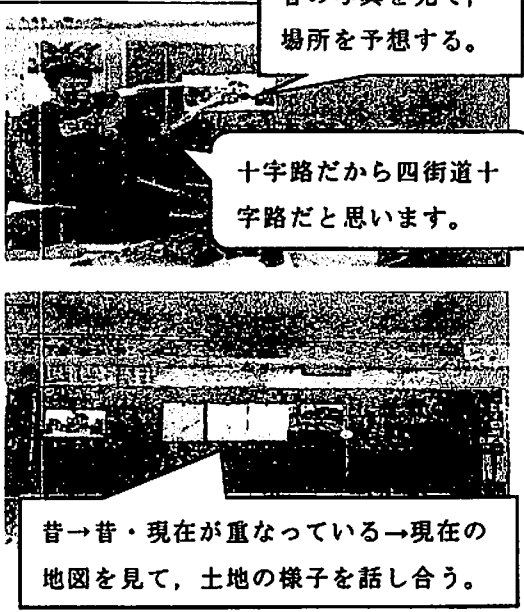
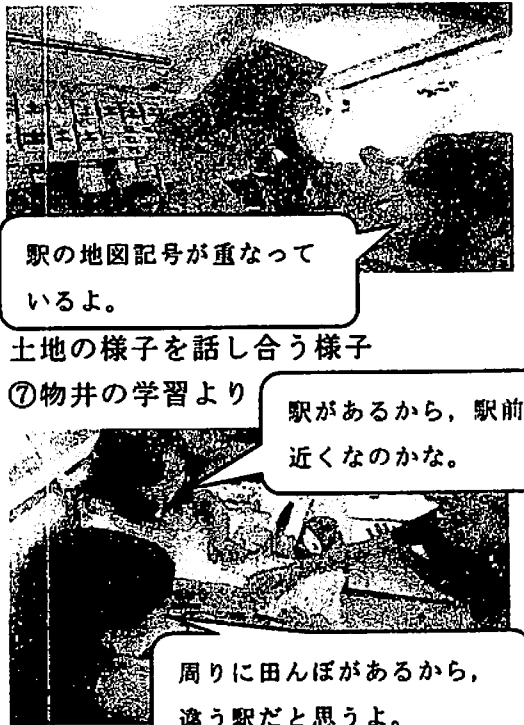
8 研究実践と授業の実際

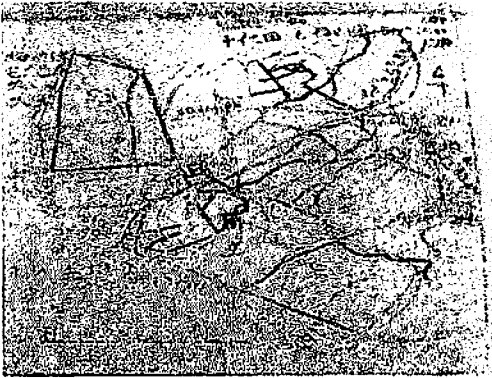

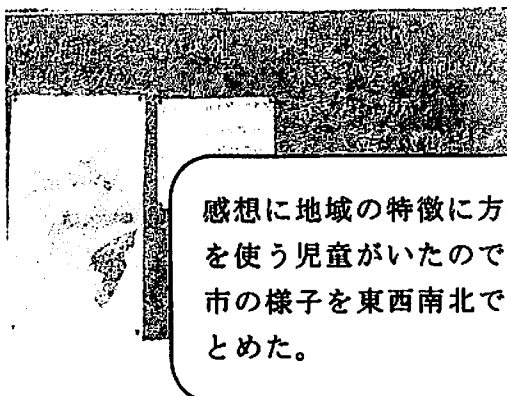
(1) 単元名 「わたしたちのまち 四街道 ～市の土地利用の移り変わり～」

(2) 単元の目標

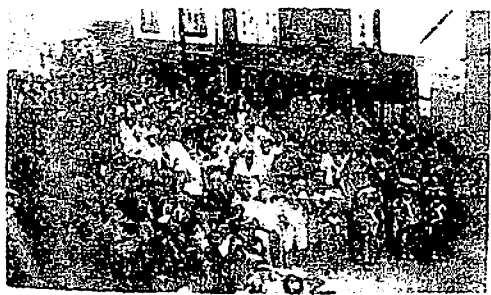
- 自分たちの住んでいる市の土地利用の移り変わりに関心を持ち、進んで調べ、意欲的に学習している。 (関心・意欲・態度)
- 自分たちの住んでいる市の土地利用の移り変わりを調べる中で、各地域の特徴を考え、適切に表現することができる。 (思考・判断・表現)
- 資料から読み取ったことや、ゲストティーチャーから聞いたことをまとめることができる。 (技能)
- 自分たちの住んでいる市の土地利用の移り変わりについて理解している。 (知識・理解)


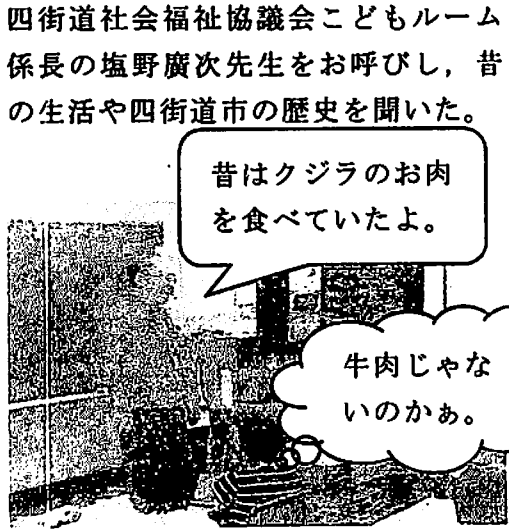

(3) 単元計画 (13時間扱い) と授業の実際
 (第1次 市の紹介マップ作り 9時間扱い)

学習過程 (時数)	○主な学習内容	授業の実際
つかむ (1)	○学区地図を発展させ、市の紹介マップを作ることを知らせる。 ○学区の過去の写真と古地図から移り変わりを現代の地図や写真と比較しながら話し合い、土地の様子を理解する。 ○マップに学区の特徴をまとめる。 ①学区…人や店が多い。	 <p>昔の写真を見て、場所を予想する。</p> <p>十字路口だから四街道十字路口だと思います。</p> <p>昔→昔・現在が重なっている→現在の地図を見て、土地の様子を話し合う。</p> <p>④四街道市は、どのような場所があり、どんな様子なのだろうか。</p>
調べる (7)	○各地域の過去の写真と古地図から移り変わりを現代の地図や写真と比較し、土地の様子を理解する。 ○マップに各地域の特徴をまとめる。 ②駅前…店が多く、にぎわっている。 ③和良比…土地が低い。 ④吉岡…緑が多い。 ⑤大日…住宅や畑が多い。 ⑥千代田・もねの里…団地など住宅が多い。 ⑦物井…土地が低く、工場が多い。 ⑧山梨・みそら・旭ヶ丘…山梨は、田が多い。みそら・旭ヶ丘は、団地が多い。	(毎時間の学習の流れは、1時間目と変わらない。) ②駅前の学習より古地図と現在の地図を重ねている。  <p>(毎時間の学習の流れは、1時間目と変わらない。)</p> <p>②駅前の学習より古地図と現在の地図を重ねている。</p> <p>駅の地図記号が重なっているよ。</p> <p>土地の様子を話し合う様子</p> <p>⑦物井の学習より 駅があるから、駅前の近くなのかな。</p> <p>周りに田んぼがあるから、違う駅だと思うよ。</p>

		<p>児童が、各地域の特徴を書いたマップ</p> 
<p>確かめる まとめる (1)</p>	<p>○各地域の特徴について話し合い、四街道市し ょうかいマップを作る。</p> <p>○方位ごとに特徴をまとめながら、市全体の様 子を理解する。</p>	<p>マップをもとに話し合う様子</p>   <p>感想に地域の特徴に方位 を使う児童がいたので、 市の様子を東西南北でま とめた。</p> <p>㊦四街道市は、住宅地や店、田、緑が多い。また、工場や畑、低い土地がある。</p>

(第2次 暮らしの変化 4時間扱い)

学習過程 (時数)	○主な学習内容	授業の実際
<p>つかむ (1)</p>	<p>○第1次の時に見た学区の様子の写真から、当 時の生活について予想する。</p>	<p>昔の学区の様子</p> 

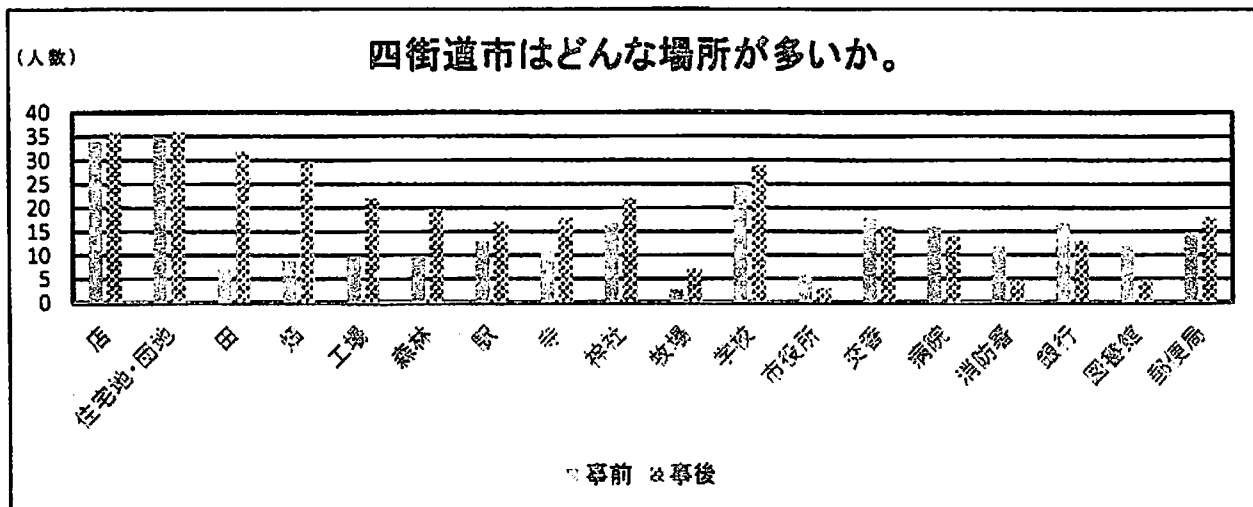
		<p>児童の発言</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. どんな物を食べていたのかな。 2. 今と服が違うね。 3. 家の中も全然違う気がする。 4. 昔の遊びが気になるな。
<p>調べる (2)</p>	<p>◎四街道市に住んでいる人たちは、どのように生活をしていたのだろうか。</p> <p>○児童の発言から、食べ物・服装・家の造り・遊びについて予想する。</p> <p>○当時の生活についてクラスで話し合い、予想を絞る。</p> <p>○ゲストティーチャー（昭和30～40年頃からの四街道市に詳しい方）から、生活や土地利用の移り変わりについて聞く。</p>	 <p>漬物をたくさん食べていたと思います。</p> <p>四街道社会福祉協議会子どもルーム係長の塩野廣次先生をお呼びし、昔の生活や四街道市の歴史を聞いた。</p>  <p>昔はクジラのお肉を食べていたよ。</p>  <p>牛肉じゃないのかあ。</p>
<p>確かめる まとめる (1)</p>	<p>○昔から現在の生活を簡単な年表にまとめる。</p> <p>○マップと年表を見て、市の様子を移り変わりの視点を入れて、まとめる。</p> <p>◎四街道市に住んでいる人たちは、くらし方や土地利用を変えながら、生活してきた。</p>	

9 仮説の検証

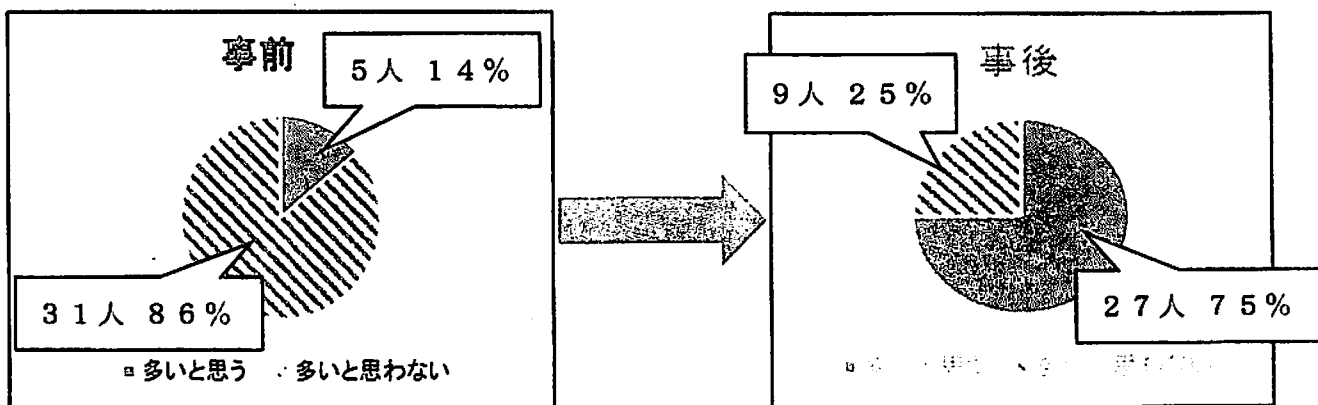
仮説1の検証 市の様子への理解が深まったかについて

検証方法は、「四街道市はどんな場所が多いか。」について事前・事後で実態調査を行った。また、毎時間のノートの記事やまとめ・感想をもとに、四街道市の様子への理解が深まったかについて以下の評価基準を設け分析した。

(1) 事前・事後の実態調査より

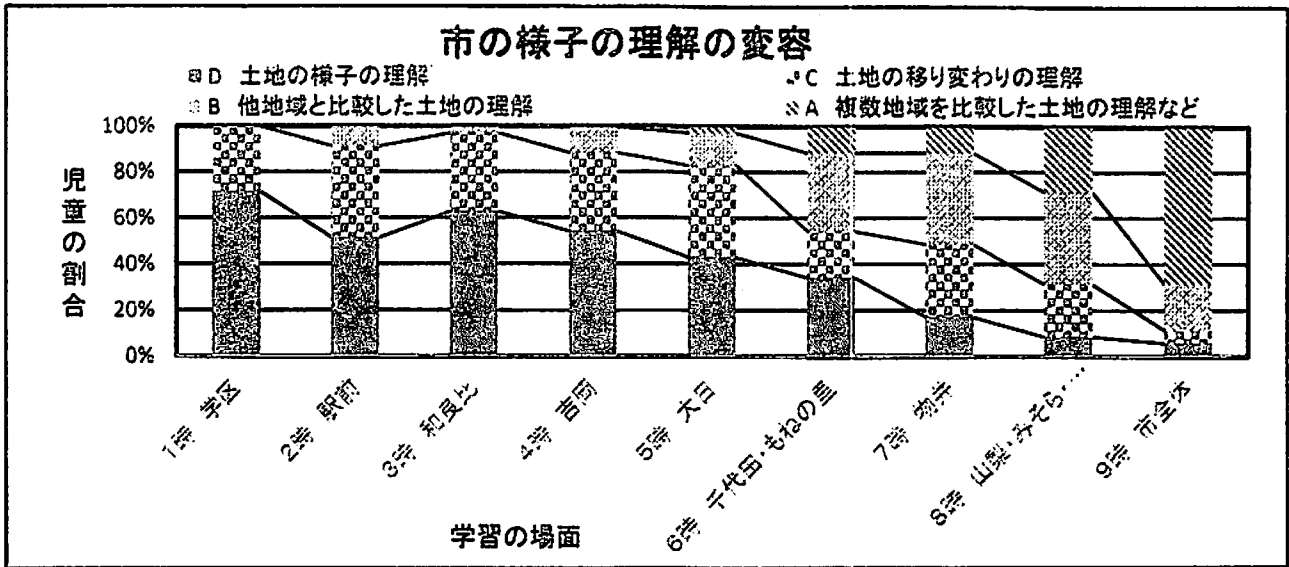


低い土地が多いと思う児童の変容



(2) 評価基準を設けたノート記述の分析より

評価	評価基準	文例
A	3つ以上の地域の土地利用の様子を比較して理解している。 (複数地域を比較した土地の理解)	「山梨は田が多くて土地が低い。物井も田が多く、土地が低かった。和良比も土地が低い。」
B	地域と地域の土地利用の様子を比較して理解している。 (他地域と比較した土地の理解)	「千代田は団地が多かったが、物井は家が少なく、土地が低いので田が多い。」
C	各地域の土地利用の様子を移り変わりの視点も踏まえて理解している。 (土地の移り変わりの理解)	「学区は、今も昔も人や店が多い。」 「学区は、今も昔もあまり変わらない。」
D	各地域の土地利用の様子を理解している。(土地の様子への理解)	「学区は、人や店が多いことがわかった。」



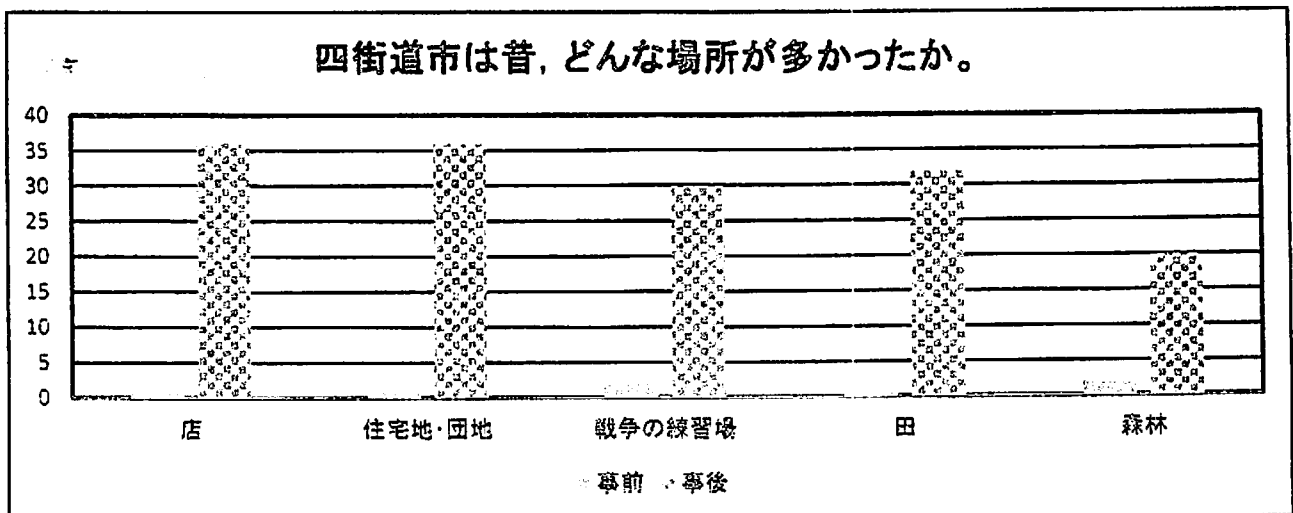
《考察①》

実態調査から、多くの児童が市の様子を理解し、低い土地への理解も深まった。これは、手立て①の学習する地域を細分化したことにより、各地域の特徴を捉えることができたのではないかと考える。ノート記述の分析からは、全員が各地域の特徴を理解することができるようになり、ほぼ全ての児童が土地の移り変わりの視点に気づくことができるようになった。他の地域と比較・関連させながら市の様子を捉えることができる児童も増えた。これは手立て①より、各地域の様子を昔と現在の地図で調べたことにより、「この地域は、昔と今で全く違うね。」や「この地域は、あまり変わらないね。」など話し合いながら各地域の特徴を捉えることができたのではないかと考える。そして手立て②より、各地域の特徴が分かった後、市の紹介マップを作成することで、複数地域を比較・関連づけて理解したり、東西南北の方位を使いながら市の様子を理解したりしている児童が増えていった。

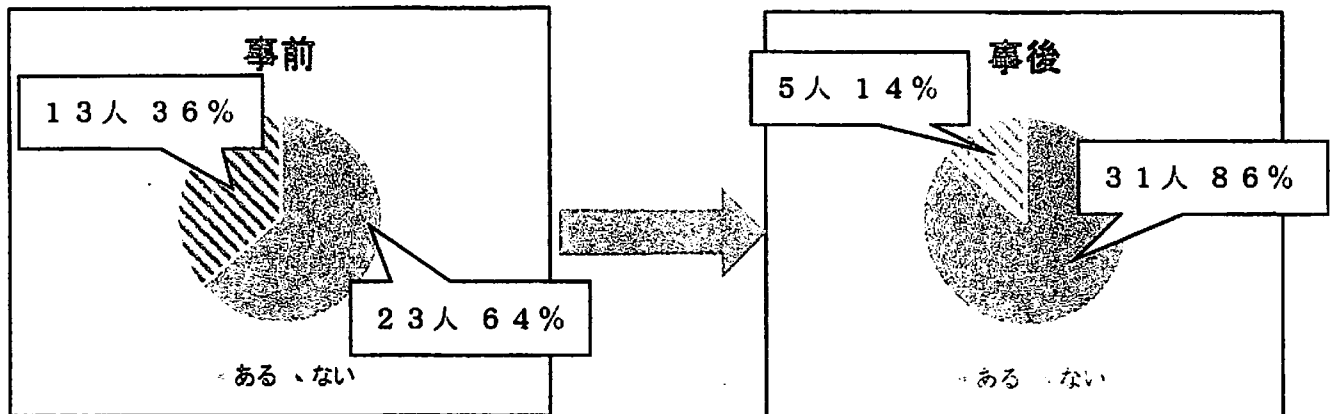
仮説2の検証 市の様子を見る視点が広がったかについて

検証方法は、「四街道市は昔、どんな場所が多かったか。」と「四街道市のことで知りたいことがあるか。それはどんなことか。」について事前・事後で実態調査を行った。

事前・事後の実態調査より



四街道市のことで知りたいことがあるか。



どんなことについて知りたいか。(△は増加、▽は減少を示している。)

知りたい項目	事前	事後	変化
市のいいところ	11	0	▽11
市の人口	6	8	△2
どんな場所があるか	6	6	0
四街道市がいつできたか	0	2	△2
市役所がある理由	0	2	△2
店がどれくらいあるか	0	2	△2
店のでき方	0	1	△1
低い土地がある理由	0	1	△1
学校がいくつあるか	0	2	△1
昔、どんな店があったのか	0	3	△3
調べた地域以外は、昔どんな土地の様子だったのか	0	4	△4

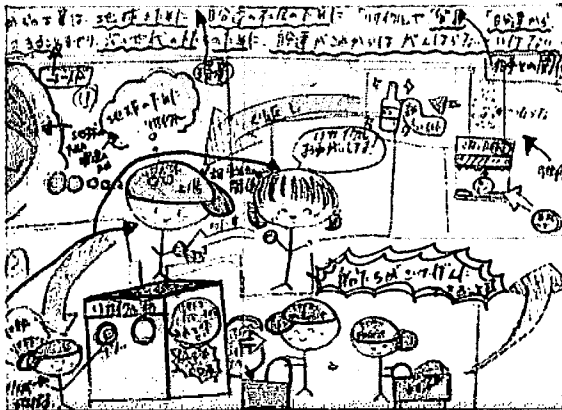
《考察②》

ほぼ全ての児童が、四街道市の昔の様子を捉えられるようになった。手立て①の各地域の昔の様子が分かる資料から、児童の中に「歴史」という視点が加わったからではないかと考える。四街道市のことで知りたいことがあるかについては、「ある」と答えた児童が、22%増えたことで、手立て①と②が有効だったと考えられる。どんなことについて知りたいかについては、事前調査では、「市のいいところ」というように大きな概念だったものが、本単元を経て、知りたい項目が精査されたり、歴史的事象が増えたりしたことからも有効性が挙げられる。

10 成果 (○) と課題 (▲)

- 本研究を通して、市の様子を細分化し、各地域の移り変わりも調べながらマップを作ることで、市の様子を理解を深めることができた。
- 昔と現在を比較・ゲストティーチャーの話から、土地利用や人々の生活の変化に気づき、市の歴史的背景に関心を持つことができるようになった。
- ▲ 市の様子を理解を「深める」という点で、土地利用の移り変わりの理解が難しかった児童もいたので、歴史的背景へのアプローチの仕方を研究する必要がある。
- ▲ 昔と現在を比較する際に、各地域によって資料の多さなどから取り上げ易さが異なるため、各地域への関心に差が出てしまった。

自らのこととして課題について考察し、
解決に向けて自ら構想していく
力を養う社会科学習の在り方
～第5学年の工業学習における
西村勝三の靴造りを通して～



1 研究主題

自らのこととして課題について考察し、解決に向けて自ら構想していく力を養う
社会科学習の在り方 ～第5学年の工業学習における西村勝三の靴造りを通して～

2 主題設定の理由

(1) 現代社会の要請から

将来の予測が困難な複雑で変化の激しい社会に、どのように向き合い、どのような資質・能力を育成していくべきか。「教育課程企画特別部会 論点整理」では、「複雑で変化の激しい社会の中では、固有の組織のこれまでの在り方を前提としてどのように生きるかだけではなく、様々な情報や出来事を受け止め、主体的に判断しながら、自分を社会の中でどのように位置付け、社会をどう描くかを考え、他者と一緒に生き、課題を解決していくための力が必要となる」ことが挙げられている。社会科の学習においても、「社会の中で自ら問いを立て、解決方法を探索して計画を実行し、問題を解決に導き新たな価値を創造していくとともに新たな問題の発見・解決につなげていくことのできる」資質・能力を育成することが述べられている。知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」を実現することが求められている。これらのことを受け、本主題を設定した。

(2) 学習指導要領から

学習指導要領の学習内容は「工業生産に関わる人々は、消費者の需要や社会の変化に対応し、優れた製品を生産するよう様々な工夫や努力をして工業生産を支えていることが分かるようにする」ことである。これらの学習について「小学校学習指導要領解説 社会編」では、「社会的事象や相互の関係、意味を多角的に捉える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力、考えたことや選択したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う」ことだとされている。このことから、本主題を設定した。

(3) 印教研研究主題から

よりよい社会の実現に寄与する「生きる力」を培う社会科学習
～自ら課題をみだし、自らの考えを実現できる児童生徒の育成をめざして～

印教研研究主題には「自ら課題をみだし、自らの考えを実現できる」とある。自ら課題をみいだす為には、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したりする活動を通して社会に見られる課題を把握する必要がある。その解決に向けて、解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることが自らの考えを実現できることにつながる。これにより、主題にある「よりよい社会の実現に寄与する『生きる力』」が培われていくと考え、本主題を決定した。

(4) 先行研究から

社会に見られる課題について考察し、その解決に向けて構想したりそれを表現したりする実践はこれまでに何度も行われてきた。

- ・平成28年度 宮川教諭実践 【他の地域教材での、自らとの関連に対する変容の考察】
- ・平成29年度 久保教諭実践 【東京オリンピック・パラリンピックに向けた課題を把握し、自分たちにできることを考える学習】

上記の実践において課題として「社会との関わりにおいて、自分に関わる活動を考えられる」

段階まで進まなかった児童がいたことが挙げられている。その理由は社会的事象同士の関連の把握が不十分だと、自らと社会との関連を捉えられないことである。そのため、本実践では社会的事象同士の関連について理解を深めることで、把握した課題の解決に向けて考察し、どのように関わっていけるかを構想するという段階まで進むことを目指し、その中で児童がどこまで変容するかについて検証するために本主題を設定した。

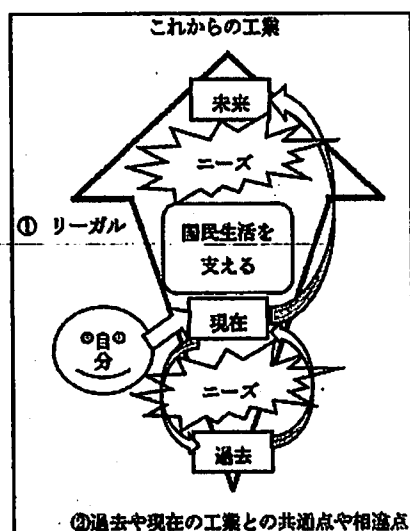
(5) 児童の実態から (5年2組 35名)

本学級の児童は社会科の学習に対する関心意欲が高く、既習事項の学習にも高い関心意欲をもって取り組んできた(資料 1-1~3 より)。一方で、自身と社会とのつながりについては、そこまでの高い関心意欲をもっておらず、自らと関連があるという意識も薄い。自身と工業のつながりや、これからの工業について考えることに関しては、さらにその傾向が強い。工業やそれに関わる人々の工夫や努力は理解している、自身がそれにどう関わっているのかという意識や、自分達の将来にどう関わっていくのかという視点はもてていない。このことから、本学級の児童は、社会が抱える何かしらの問題を把握するという点において課題があると言える。そのため、当然構想することも難しいため「社会と自らとの関連」という視点がなく、他者的に社会的事象同士の関連を捉えることに終始してしまっていると言える。一方、自分が住む佐倉に対してはそのすばらしさを理解し、好きだと感じている児童が多くいる。児童は1年生から「佐倉学」という佐倉についての学習を積み重ねてきており、それが佐倉への愛着の要因だと考えられる。しかし、佐倉の先人が、自分達の暮らしを支える工業に多大な貢献をしたことについて児童は全くと言っていいほど知らなかった。あくまで「ふるさと佐倉のために頑張った人達がいた」という意識にとどまっており、よりよい社会の実現のために尽くしてきた先人の姿はそこから見えてきていない。また、「明治日本の工業の父」とも称される西村勝三の功績についてはどの児童も知らなかった。このため本実践では、西村勝三やREGALの取り組みを用いて、身近な課題に気づき学びに向かう力を高めていきたい。さらに佐倉の地域教材を取り入ることで、自らと社会とのつながりや、昔と現在との共通の課題が明確になり、これからの日本の工業との関わり方を考えていけるようになることを考え、本主題を設定した。

3 主題について

(1) 課題を考察するとは

課題を考察するとは社会的な見方・考え方をもとに「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考察すること」であると捉えた。社会的事象の特色や関連、意味を多角的に考察することができれば、社会が抱える課題について正確に把握することができるだろう。そこで本実践では次のようなことが出来れば課題を考察できたと捉えた。1点目は「工業生産に関わる人々が、消費者の需要や社会の変化にどのように対応したのか理解すること」。2点目は「明治時代も現代社会も共通する課題があることを理解すること」である。児童は自らと社会の関わりを実感できておらず、これからの日本の工業について構想することが難しい。そこで、地域の先人である西村勝三など工業生産に関わる人々が消費者の需要や社会の変化にどのように対応したのかを知ることで、時代によって社会が求めるニーズ



は変化しているが、ニーズに応えるという姿は変わらないことを社会科の見方・考え方の1つである時間を追って理解することで、課題について考察することができるようになるであろう。

(2) 解決に向けて自ら構想していくとは

解決に向けて自ら構想するとは、「社会に見られる課題を自分事として捉え、関わり方を選択・判断すること」と捉えた。社会に見られる課題へ自分なりに関わり方を選択・判断することができれば、社会が抱える課題の解決に向けて構想できるだろう。本実践では、解決に向けて自ら構想していく児童の姿を以下の2点とした。1点目は「これからの工業に求められている課題が何であるのかを把握し、解決策を考える」こと。2点目は「工業が抱える課題に対して、自らの課題と捉えて関わり方を考える」ことである。

4 教材について

(1) 佐倉の先人 西村勝三

西村勝三は、明治期の実業家として新しい産業を次々と興した人物である。特に西洋靴の製造に関しては、「日本靴の父」と呼ばれるほどの人物であり、佐倉市民体育館前に日本製靴組合が建てた銅像が立っている。西村勝三は西洋に負けない製品を造り続け、その興した企業は現在にまでしっかりと受け継がれている。その企業が100年以上にわたって社会に貢献できるということは、創業当時の経営者の理念が明確であり、その製品が社会にとってなくてはならないものであったということである。また当時の社会が求めるニーズに対応した製品を造り続けてきたことを知れば、それが今の工業にも受け継がれた理念だということに気づくだろう。私たちの生活に欠かすことのできない日本の工業の基礎を築いた地元佐倉出身の西村勝三の功績を紹介することで、児童の工業への興味関心が高まり、児童はより自分と工業の関連を捉えやすくなるだろうと考える。

(2) REGAL

REGALは1902(明治35)年の創業以来、一貫して靴の企画・製造・販売に従事する製靴会社である。上記の佐倉の先人西村勝三が創業に関わっており、これからの工業と自分自身の関連を考えさせる際に児童が興味をもち、自分達とのつながりを見つけやすいのではないかと考えた。100年以上の歴史を持つREGALは、日本の工業の始まりとほぼ同時に誕生し、日本の工業が取り組んできた工夫や努力がその社史と共に表れているといえる。これからの社会が求めるニーズや要望、グローバル化にも対応できるよう多くの取り組みを行っており「工業生産に関わる人々は消費者の需要や社会の変化に対応し、優れた商品を生産するよう様々な工夫や努力をして、工業生産を支えていることを理解する」指導要領の内容に関わる活動を行っている。現在の取り組みを知るだけでなく、過去における工夫や努力、そしてこれからの取り組みについて知ることで、児童は日本の工業が行ってきた取り組みが、いつの時代も社会のニーズに応えてきたものであることに気づき、これからの工業の姿について地に足がついた考察をすることができるようになると思った。

5 研究の目標

これからの工業の姿を考察する学習において、地元佐倉出身の人物の功績を教材化し、自らと社会との関連を捉えれば、児童の課題を把握し解決に向けて自ら構想していく力が育成できることを実証する。

6 研究の内容と方法

【研究内容／研究方法】

- ア 児童が社会に見られる課題を把握する力を育む指導法／授業実践と児童の変容の分析
- イ 児童が課題解決に向けて自ら構想できる力を育む指導法／授業実践と児童の変容の分析
- ウ 第5学年の学習における地域素材の教材化／地域の企業や人材を調査、教材研究

7 研究仮説と手立て

【仮説1】

地域教材の活用や、他教科と関連させる教科横断的で時間の経過に着目した学習過程を編成すれば、学習内容が身近になり、現代社会の課題を自分のこととして課題を考察できるようになるだろう。

手立て① 地元佐倉に関わりのある教材を取り入れたり、他教科と関連づけたりする

本実践で扱う佐倉出身人物の西村勝三は、先述したREGALと密接に関わっている。本実践の導入でREGALの靴造りの様子や30年以上経っても履き続けることができるREGALの靴を見たり、100年以上前から日本の靴造りを支えてきたことを知ったりすることで、児童に「いつから」「だれが」ここまでのこだわりをもって取り組んできたのかということに疑問をもたせる。その後REGALの創業に関わった佐倉出身の西村勝三の功績を紹介することで、児童は学習内容をより身近に感じるであろう。西村勝三は道徳の教材にもなっている人物で、西村勝三が私欲ではなく世のため人のために靴造りに取り組んだことは、現在のREGAL社是である「お客様第一・社会から高い信頼を得る」という考えにつながっている。社会科と道徳での教科横断的な学習を通して、社会に見られる課題の解決に向けて努力を惜しまなかった先人の姿をより深く知れば、現在の社会に見られる課題を先人のように自分達で解決していこうと考えることにもつながるであろう。

手立て② 過去と現代の工業について調べ、時間を超えて共通する課題への理解を深める

児童がこれからの日本の工業について構想できるようにするため、過去と現在の工業の共通点や相違点について調べる活動を取り入れる。導入の段階で、現在のREGALの工夫やこだわり、努力について映像を見たり資料を読み、多くの工夫やこだわりがあることについて学び、これらが創業以来一貫して取り組まれてきたものであることを知る。

次にその創業に関わった西村勝三について取り上げ、西村勝三が設立したREGALの前身である櫻組の功績について知る。明治時代の靴造りにおいて、当時の社会が求めた「質のよい靴を、大量に、素早く供給する」ことに対応できるように人材の育成や新技術の導入などに取り組んだことを取り上げる。当時の社会のニーズに対応することで日本の工業が発達してきたことを理解できるだろう。過去も現在も社会のニーズに応えることができるように多くのことに取り組んでいる事実を実感できるようにする。それらを通して、これからも工業が発達するには社会からのニーズが必要であること、だから自分達が考えていくことが必要であると気づくであろう。

【仮説2】

学習協力者を活用して過去と現在の工業の共通点や相違点をもとに考えたりすることで、これからの日本の工業について調べたり、これからの工業の姿を未来予想図で表現することで、より自らと結び付けて構想できるだろう。

手立て① 質問やメールでのやり取りを通し、工業に関わる人々とのつながりを作る

課題を把握し自らのこととして考える際に、児童は資料やホームページ等を活用して調べ学習を進めていくが、おそらく現在REGALが取り組む工夫やこだわり、努力についてはごく一部しか知ることができないだろう。さらに、今後REGALが取り組もうと考えている課題や社会からのニーズを知ることは難しい。そこで、REGALアーカイブス館長をされているFさんと連絡をとり「今REGALに求められているものは何か」「これからどのようにそれらに対応していくのか」「今消費者や社会からはどのようなことが求められているのか」といった疑問に答えてもらう。さらに現在の工業の最前線で働く方々を身近に感じ、現代の工業が抱える多くの課題について知れば、これからの工業に対する問題意識をもたせることができるようになると思った。質疑応答の中で児童に返してもらうことで、これからの工業の姿を考察する際に、地に足のついた解決方法を構想していくことができるようにする。実際に工業に関わっている人たちに向けて質問し意見を聞くという活動を行うことで、児童は自分が社会と関わっていかなければならないということを実感できると考える。

手立て② これからの工業について構想する際に、まとめ方を工夫する

これからの工業について構想する際に工業に直接関わりがない児童がその姿を構想し表現することは難しいであろう。そこで、まずはこれからの工業について未来予想図を描くことで児童がこれからの工業の姿を構想することができるだろうと考えた。学習を進め、課題を把握する中でこれからの工業についての理解や課題の認識が深まった最後に、これからの工業の姿を構想していく。既習事項をもとにしてニーズから課題をクリアした姿を描かせるようにする。さらには自分自身や友達同士で評価し、しっかり課題が意識されているか考えさせながら取り組ませる。そのことが「自分達で何かしら工業に関わることができるかもしれない」「もしかしたら自分たちで社会を変えられるかもしれない。」という意識をもたすことにつながれると考える。

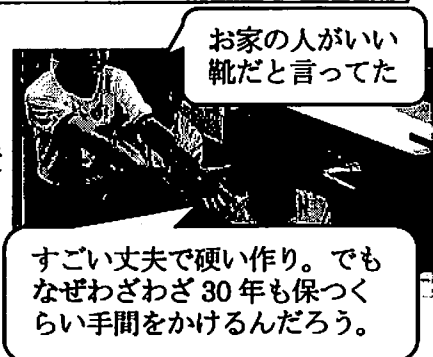
8 仮説の検証と授業の実際

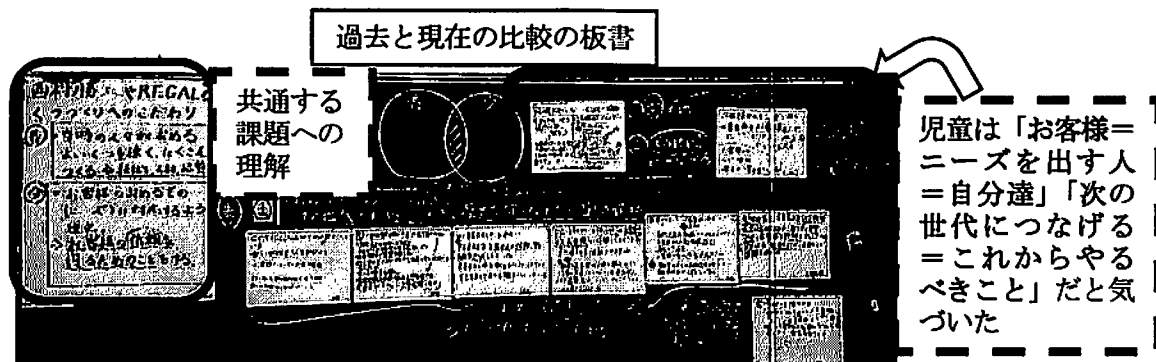
【仮説1】

手立て① 地元佐倉に関わりのある教材を取り入れたり、他教科と関連づけたりして扱う。

第2時に地元佐倉と関わりのあるREGALを活用した。REGALの存在を知らない児童に実物のREGALの靴を見せたり、REGALの製造過程の動画を見せたりして工業に対する興味関心を高めた。さらにREGALの靴を30年近く使い続けている本校の職員に話をしてもらい、このREGALが佐倉と関わりのある会社であることを紹介して興味関心を高め「なぜここまでこだわりをもつのだろう」「いつからこのような取り組みをしているのだろう」といった工業への疑問をもつことができるようになった。また現在のREGALが取り組む工夫や努力について学び、これらが最近ではなく昔からのこだわりであるということに気づいた。(資料2)

佐倉学と関わりのある西村勝三のことについては、道徳の時間に学習を行った。佐倉の先人西村勝三という題材で「世のため人のためになることをしよう」という心情である「成徳作用」





以上のことからこれからの工業も同じように社会からのニーズに対応することで発達していくことを考察できた。さらに児童はこの時点でこれからの工業を考える際に、どのようなニーズが求められているのかや、ニーズを考えていくのは自分達がやるべきだということ、それを次の世代につなげるといったことまでを考え、教師側が設定した仮説を飛び越え、考察することができた。授業後に「過去と現在の比較」という観点で、児童の意識調査を行い、その変容を捉えることができた。

項目	事前	事後	変容の見られた児童
日本の工業が栄えた理由	3人 (8%)	35人 (100%)	A児: 事前高い技術がある。 事後高い技術を昔から取り入れる姿勢が、現在にもつながっている。それで様々なニーズに <u>応えることができるから発達した。</u>
昔の工業と、今の工業とはどんな関係があるのか	0人 (0%)	19人 (77%)	B児: 事前昔のことはわからない。 事後今も昔もニーズに応えるために新しい技術を考えたり高い技術を保とうと努力したりしている。 <u>ニーズに応え続けている。</u>

【仮説2】

手立て① 質問やメールでのやり取りを通し、工業に関わる人々とのつながりを作る。

児童はFさんからいただいたメールをもとに、REGALの取り組みやこだわりの多くを知ることができた。児童はこのやりとりを通して、工業に関わる人々を身近に感じ、地に足がついた解決をしようとしていることに気づいた。「これからの工業について考える際にはニーズを考える必要がある」「そのニーズは自分達が考えていかなければならない」という意識をもった。児童の感想や振り返りからもわかる。

F様よりいただいたメール。REGALの取り組みやこだわりがこと細やかに記されている。

社外秘の事項もありますのでご承知くださいませ。
 ①「REGALはお客様からの要望・ニーズにどのように対応しているのか」
 ⇒直接の要望については、その部署専門部署の対応になります。
 例えば遠隔地からの希望の場合はより近い当社専門店舗、販売店舗をご紹介、及び店舗の連絡先などをお伝えしています。

②「どのようなニーズが求められているのか」
 ⇒社外秘の事項もあるので具体的には記しませんが新しい靴の企画に始まります。
 材料(皮革、布、釘、糸他10種類程度の材料が必要)選定、それらを調達するために海外の事業所や商社、国内企業と打合せ、それらが整った段階で製造工場を決め、ライン管理を検討します。
 同時に販売広告等の販促活動を専門部署、広告代理店と打合せ、発売前後に併せて広報します。
 これらの内、材料、製造部門では環境に対する取り決めが為されます。例えば、多くの靴の材料である牛革を使えない方々がいる市場や国では、他の皮革(山羊や豚など)を代わりに使う事もあります。

③「どのようにしてそれらの要望やニーズを知るのか」
 ⇒当社は116年(1902年創立)靴を作っていますが、昔も今も変わらないのは靴を履かれる方の全ての体重を支え、しかも歩くだけでない様々な外的・内的圧迫を常時受ける過酷な環境に耐え安全に足を守る靴であるように努力しています。
 その為には靴をただ作って売ってだけでなく、様々な改善、販売員が顧客より受ける要望やお願い(インターネット、ファックス、電話等込)を速やかに靴作りに反映させる仕組みを長い間培ってきました。当然今後もより良い靴作りをする為のそれらの努力を続けなければ成らないと全社員が努力しています。

要望やニーズに応えることへの理解

④ 今より、お母様から受ける要望の関わり
 違ってもいいけれど、自分も関係する
 気持ちで、お母様から受けることに

⑤ ①②③④の4つの要素の理解を促す
 ために、お母様と子どもに合わせた
 支援が必要。例えば、お母様の気持ち
 について、お母様から話を聞いてみる。
 ⑥ ⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓
 => お母様の気持ちの理解

・A: 2-お母様の気持ち

●REGALに入ってくる要望
 ① 国では、牛を殺して牛乳を作ろうなことは許さず
 => お母様の気持ちの理解
 ●それはどうや、ア知るか
 実際には、お母様のPC、FAX、TELでも聞く(=ア)、
 それを知ったうえで対応できるようにする

自分達がニーズを考えることへの意識

① 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ② 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ③ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ④ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ⑤ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ⑥ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ⑦ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ⑧ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ⑨ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ⑩ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ⑪ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ⑫ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ⑬ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ⑭ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ⑮ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ⑯ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ⑰ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ⑱ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ⑲ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ⑳ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ㉑ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ㉒ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある
 ㉓ 自分達が工業のために自分自身で考える必要がある

自分達も考えた、工業のニーズをだして、
 工業がこれからの未来を担ってほしい
 と思っていて

REGALのものを買えば、お母様の気持ちの理解、これから、
 自分自身の関係の理解、お母様の気持ちの理解、
 他人の関係の理解、お母様の気持ちの理解、
 自分達のニーズを伝える

手立て② これからの工業について構想する際に、まとめ方を工夫する

まとめ方を工夫した指導や、KJ法やホワイトボードを活用した話し合い活動を通して、児童は「ニーズに応える必要性」や「相手意識をもつ大切さ」、「誰に向けた構想か」ということを意識して考えることができるようになった。

例えば、児童Aの場合を見ると

事前 かんきょうな環境
 事後 大学人材育成場
 事後 工業 人に
 喜んでもらえるのがいい

前時では「誰が」「なぜ」
 やるか分からない内容で
 あったものが「自分が協
 力する」「工業の人材育成
 のための大学ができる」
 などニーズに応える姿が
 見られた。

児童Bの場合のように「相手意識の変化」が見られた児童もいた。

事前 事後

最初の未来予想図は、一方的な関係（工業側が自分達に提案）。
 事後の未来予想図は、自分と工業、
 社会が様々な関係でつながっていることを多角的に考察し、自分が
 どのように関わっていくのか構想
 することができている。(資料2に

児童Cの未来予想図では、

「誰に向けた構想か」が不明瞭な未来予想図から

工業の課題を自らと関連したものにとらえ、自分にできることや取り組めることについて考えることができるようになった「誰に向けた構想か」⇒次の世代へつなげる取り組み

理由：自分達のいる地球にから、次の世代へとつなげるため

授業後に「これからの工業」という観点で、児童の意識調査を行い、その変容を考察した。

項目	事前	事後	変容の見られた児童
これからの日本の工業はどのように変わっていくか	3人 (8%)	35人 (100%)	◎児：事前もっとすごいものを発明する。 事後私達の社会のためや、これからも続く相手との関係のことを考え、より信頼されることを目指す。
これからの日本の工業と自分自身の関係について	19人 (54%)	35人 (100%)	◎児：事前身の回りにたくさんの工業製品がある。 事後将来自分達も関わっていくから、今の日本のこだわりなどを受け継いでいきたい。社会科で学習したことを役立てたい

現代と過去の工業について調べ、時間を超えて同じように課題を解決してきたことを知り、これからの工業について自分との関連をもとにして構想することができる児童が増えた。

9 成果と課題

〈成果〉

- 地域教材や他教科と関連させる活動、過去と現在の工業の共通点や相違点をもとに考えることを通して、課題が明確になり、自らを取り巻く社会が抱える課題について考察できるようになった。
- 学習協力者を活用したり、これからの工業の姿を構想する未来予想図を用いてまとめたりすることで、これからの日本の工業についてより自らと結び付けて構想できるようになり、自らと社会との関わり方について考えることができた。

〈課題〉

- 児童の主体的な取り組みを生かし、「社会との関わり」においてさらに先へ進ませるための単元構成や指導法についての研究が必要である。
- 学んだことを再提案したり、知識のアウトプット化をしたりすることができなかった。

10 学習のアウトライン (わたしたちの生活と工業生産) 22 時間 (+ 道徳 1 時間)

本実践を行う上で、以下のように学習のアウトラインを設定した。

【工業生産と工業地域】 3 時間

太平洋ベルトなどの全国各地の工業地域や輸送網、海外との関係への理解を深める。

【くらしを支える製鉄業】 6 時間

消費者や社会のニーズに合った先進的な技術を開発したり環境への配慮や復興支援をしてわたしたちのくらしや社会を支えていることへの理解を深める。

※加工貿易や輸出入のこと、環境への取り組みなどに見られる工夫や努力をここで抑えた

【工業生産を支える】 5 時間

日本の工業生産は中小工場の高い技術やものづくりの伝統、運輸の働きで支えられていることへの理解を深める

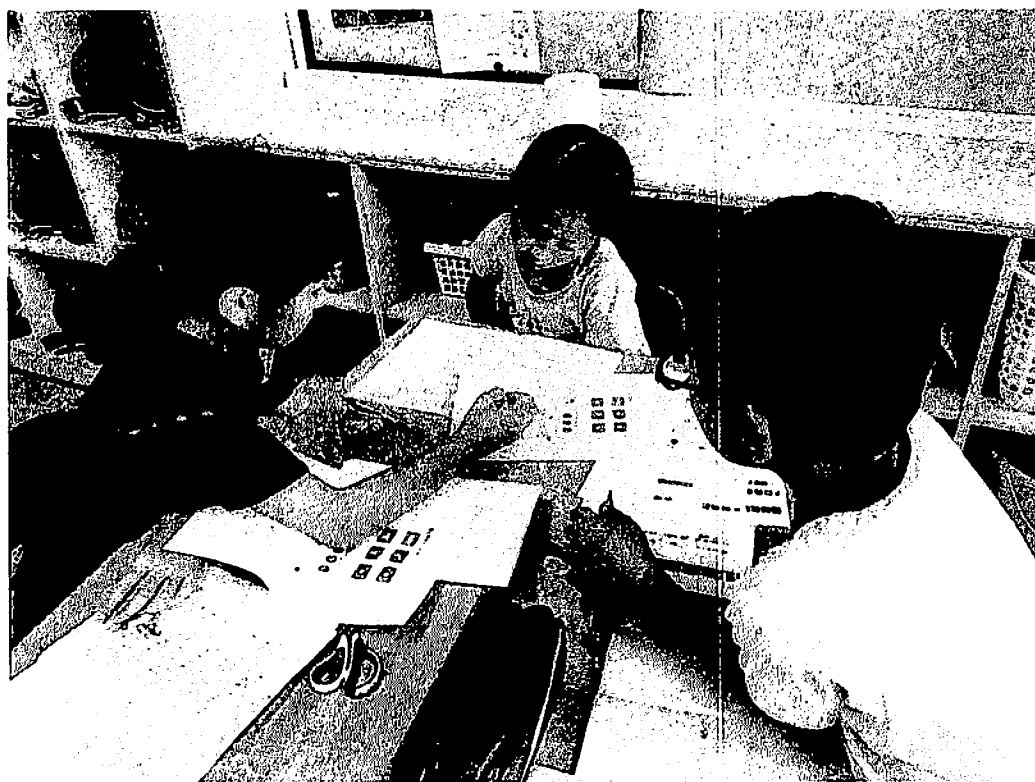
【これからの工業生産とわたしたち】 本実践 8 時間 + 道徳 1 時間

日本の工業生産を発達させていくには、輸入と輸出のバランスをとる、持続可能な社会を目指すための取り組みを進めるなど、様々な課題の解決が必要であることへの理解を深める。

※本実践のアウトラインについては、**資料 6**に記載した。

第68次印旛地区教育研究集会
(社会科教育・小学校)

児童が自ら課題をみだし追究する社会科学習の一実践
～第5学年「情報化した社会とわたしたちの生活」の実践を通して～



富里市立富里小学校
高嶋 親史

1 研究主題

児童が自ら課題をみだし追究する社会科学習の一実践

～第5学年「情報化した社会とわたしたちの生活」の実践を通して～

2 主題設定の理由

(1) 新学習指導要領から

本単元は、新学習指導要領の以下の内容に基づいて設定したものである。

目標 (1)	我が国の国土の地理的環境の特色や産業の現状、社会の情報化と産業の関わりについて、国民生活と関連を踏まえて理解するとともに、地図帳や地球儀、統計などの各種の基礎的資料を通して、情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。
内容 (4)	我が国の産業と情報の関わりについて、学習問題を追及・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。 ア (イ) 大量の情報や情報通信技術の活用は、様々な産業を発展させ、国民生活を向上させていることを理解すること。 イ (イ) 情報の種類、活用の仕方などに着目して、産業における情報活用の現状を捉え、情報を生かして発展する産業が国民生活に果たす役割を考え、表現すること。

学習指導要領の改訂に伴い、第5学年の「情報産業とわたしたちの暮らし」で扱う、我が国の産業と関わりについての内容に販売、運輸、観光が新たに加わった。今日、情報通信技術 (ICT) の急激な発展により、瞬時にビッグデータを収集したり、発信したりすることができるようになった。このようなビッグデータを活用することで、我が国の産業が大きく変化し、それに伴い国民の生活の利便性も向上している。そのことを学ぶために、新たに加わった項目の中で、児童にとって身近な販売に焦点を当てて、コンビニエンスストアではどのように情報が活用されているかを取り扱うことで、児童が自ら課題をみだし追究できると考えた。

(2) 印教研社会科学部研究主題より

よりよい社会の実現に寄与する「生きる力」を培う社会科学習
～自ら課題をみだし、自らの考えを実現できる児童生徒の育成を目指して～

現代社会は、知識基盤社会やグローバル化が進む今、児童に基礎的・基本的な内容を確実に身に付けさせ、自ら学び、自ら考える力を培うことは、これからの社会の急激な変化に対応するために必要なことだと考えられている。

そこで、本研究では、問題解決的な学習を進めることで、児童が自ら課題をみだし、追究できるように努める。特に、導入段階で身近な素材を扱うことにより主体的・対話的に課題をみだせるようにする。それが、生きる力を培うことにつながると考え、本研究主題を設定した。

(3) 児童の実態から (5年4組 30名)

本学級の児童は、社会科学習に意欲的に取り組むことができる。特に、調べ学習に熱心な児童が多い。しかしながら、社会科学習が嫌いで調べ学習を苦手としている児童が2割程度みら

れる。苦手に思っている理由として、「課題を的確に把握できていない・調べる方法が分からない・課題に対して面白みを感じない」などが考えられる。また、情報についての事前調査を行った。『情報』という言葉聞き、連想することとして挙げられたのは、気象情報や渋滞情報などであった。生活する中で、比較的身近なものだからと考えられる。一方で、無回答の児童も見られた。『情報』というものが具体的にどのようなものが分からないためと考えられる。

そこで、身近でありながら意外性のある素材を教材として扱うことにより、児童が課題を発見し追究する力を育むことができると考え本研究主題を設定した。

3 主題について

児童生徒が社会的事象に関心をもって進んでかかわり、課題追究する力の育成、また、児童一人一人に社会的な見方や考え方が次第に養われるようにすることが求められている。そこで、問題解決的な学習を一層充実させ、児童自らが課題意識をもち、学習問題を立て、社会的事象への関心を継続しながら主体的に課題を解決していく。そして、学習を通して、地域社会や我が国の国土、産業、歴史などに対する理解と愛情を育てる。

本研究では、主題に迫るために新学習指導要領で新たに設けられる「情報を活かして発展する産業」を先行で実施することとした。社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を取り入れた単元開発をすることで、これからの社会科学習のあり方を考える一助になると考え、本研究主題を設定した。

4 研究の目標

身近でありながら意外性のある素材を教材として扱うことにより、児童が自ら課題をみだし追究できることを、実践を通して明らかにする。

5 教材開発について

今回の学習指導要領の改訂の中で、第5学年内容(4)「我が国の産業と情報の関わり」では、ア(ア)及びイ(イ)において、従来と同様に放送、新聞等の産業を取り上げるようになっており、この内容については、大きな変更はない。しかし、「情報を活かして発展する産業」については、我が国の情報産業の現状を踏まえて、これまでの「情報化した社会の様子と国民生活」に変わって新設されたものである。我が国の情報サービスに関わる産業は、現在売上高においても従業員数においても大きな割合を占めている。このような現状から、情報や情報技術を活かして発展している産業について学ぶことが大切と考えられ、つくられた単元である。

扱う産業として、指導要領では、販売、運輸、医療、観光、福祉が取り上げられた。本研究では、その中でも児童にとって最も身近と考えられる販売を取り上げ単元を構成した。販売業の中でも、児童の生活に密着しているコンビニエンスストアを教材とすることで、児童が課題を自ら考え、追究できるのではないかと考えた。教材化するにあたっては、実際に地域にあるコンビニエンスストアに取材をした。そこで、情報がどのようにして集められ、どのように活用されているのか、さらに、それが自分たちの生活にどのように影響を与えているのかということなどを調べ、教材化した。導入の段階では、地域にある2つのコンビニエンスストアの店内の様子を比較する活動を取り入れた。2つのコンビニエンスストアは、同じ系列にもかかわ

らず、商品の陳列の様子が全く異なる。児童には、そこに着目させることで、「なぜ」「どうして」という疑問を引き出し、自ら課題設定ができるようにした。その課題を追究するために、コンビニエンスストアへの取材で得た情報を教師が資料としてまとめ、調べる段階で必要に応じて児童に示していった。更にまとめ上げる段階においては、ゲストティーチャーとして実際にコンビニエンスストアで働く人に来てもらい、話を聞く活動を取り入れた単元を構成した。

6 研究の仮説及び手立て

【仮説1】

地域と関わりのある販売店を教材化することで、自らの課題をみだし、考えをもちながら学習を進めることができるだろう。

手立て1 学区内のコンビニエンスストアを比較

教材として、今回はコンビニエンスストアを取り上げる。児童が住む学区内には、同じ系列のコンビニエンスストアが2店舗（国道沿いのA店と県道で児童が通学路として通るB店）ある。その2店舗が扱う商品に違いがあることを気付かせて興味や疑問をもたせることで、課題意識をもって意欲的に調べ学習に取り組むことができると考えた。

具体的には、店内の商品の陳列の様子が分かる写真を提示し、比較させる。そこから、違いをみだし、なぜそのような違いがあるのかという疑問を想起させることにつなげていく。

また、自分たちの身近にあるコンビニエンスストアを教材として取り上げることで、児童の課題追究への意欲を高めていく。

手立て2 ゲストティーチャーや指導者自作の副読本の活用

調べ学習を通して出た疑問を追究するため、コンビニエンスストアのオーナーをゲストティーチャーとして迎え質問する時間を設けた。直接関係者に話を聞くことで、より理解を深めることができると考えた。

また、インターネットの中から情報を見つけ出すことが苦手な児童や何を調べてよいか分からない児童に対して、指導者作成の副読本を活用した。この副読本は、コンビニエンスストアや本部に取材に行き得た情報を基に、情報ネットワークの活用されている現状を分かりやすい言葉を使ってまとめた物である。この副読本を使用することで、調べ学習が苦手な児童や何を調べてよいか分からない児童の意欲が継続すると考えた。

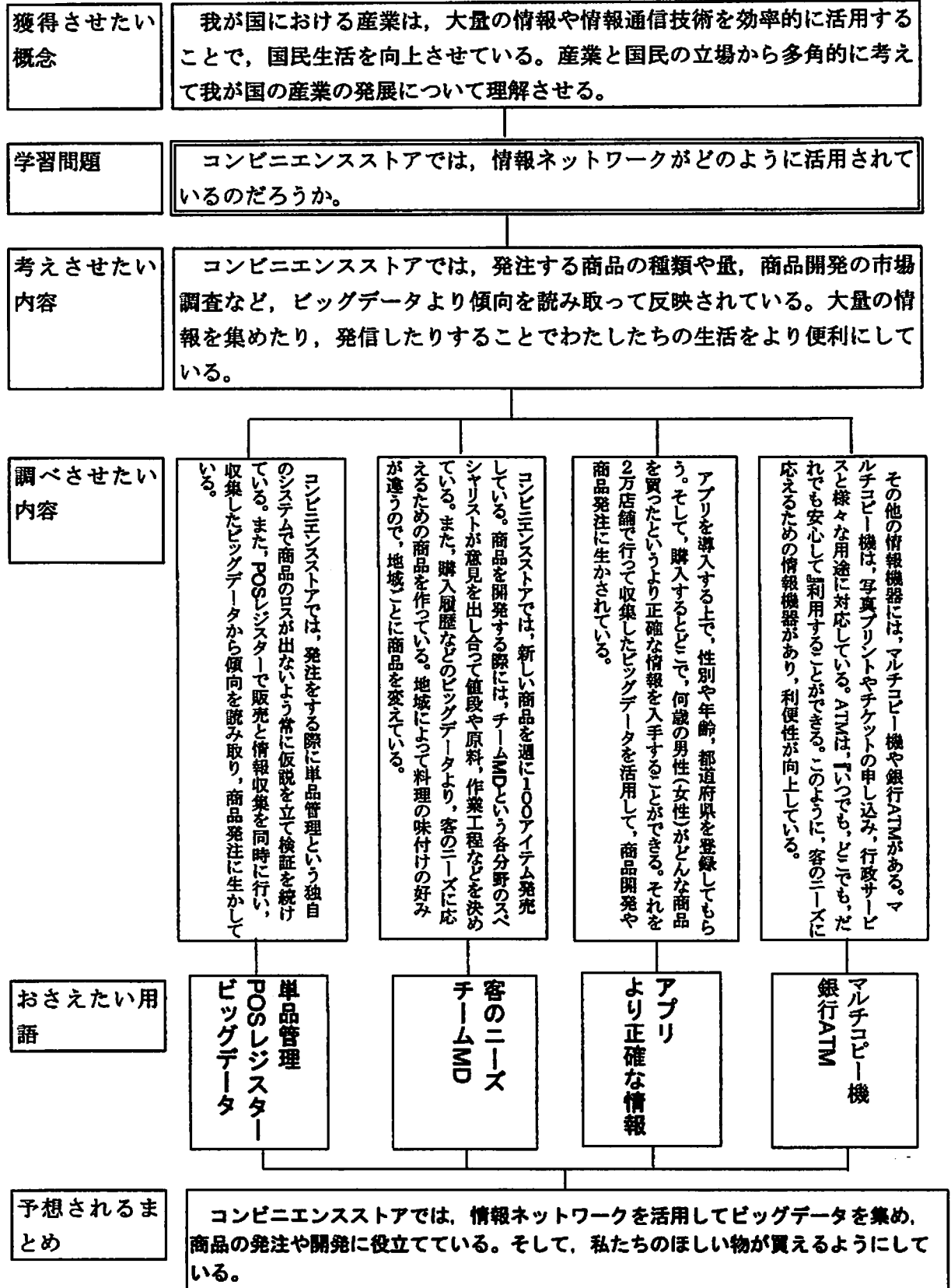
【仮説2】

思考ツールを用いることで情報や考えを可視化でき、思考を整理することができるだろう。

手立て 情報ネットワークの活用を可視化するためフィッシュボーンを使う

思考ツールとは、情報を可視化し、思考を方向付けるもの、考えを進める手続きをイメージさせる図として見せるためのもの、考えることを助けてくれるものである。そこで、「確かめる」の過程において、思考ツールの1つであるフィッシュボーンを用いることとする。フィッシュボーン（特性要因図）は、1つの事柄に対する要因を整理するのに用いられる。本研究では、情報ネットワークの活用のされ方をフィッシュボーンを使って可視化し、関連性をみだしていくこととした。

7 単元構成図



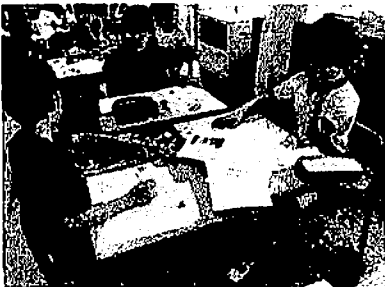

8 実践研究


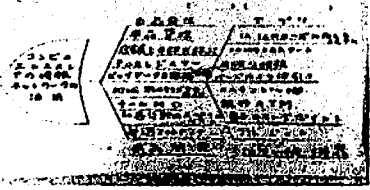
(1) 単元名 情報化した社会とわたしたちの生活

(2) 単元の目標

- ・大量の情報や通信技術の活用は、様々な産業を発展させ、国民生活を向上させていることを理解するとともに、聞き取り調査や各種資料で調べてまとめる技能を身に付ける。
<知識・技能>
- ・情報の種類、情報の活用などの知識を基に、産業における情報活用の現状を捉え、情報を生かして発展する産業が国民生活に果たす役割を考え、表現することができる。
<思考力・判断力・表現力等>
- ・意欲的に問題解決に取り組み、多角的な思考や理解を通して、我が国の産業の発展を願い、我が国の将来を担う国民としての自覚を養う。 <学びに向かう力・人間性等>

(3) 指導計画（8時間扱い）

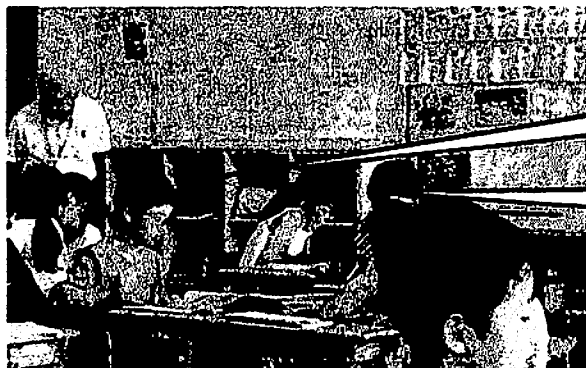
課程	学習活動と内容	期待する変容の姿	時数
つかむ	<p>○学区にある同じ系列のコンビニエンスストアの商品の写真を提示して、気付いたことを話し合う。</p> <p>○店に置いてある商品をどうやって決めているのかをコンビニエンスストアの店舗数と売り上げの変化が分かるグラフを提示して話し合う。</p> <p>○学習問題を立てる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>コンビニエンスストアでは、情報ネットワークがどのように活用されているのだろうか。</p> </div> <p>○学習問題について調べる計画を立てる。</p>	<p>・2つのコンビニエンスストアの写真から、置いている商品に違いがあることに気付いて話し合うことができる。</p> <p>・系列店が増え続けて、売り上げが伸び続ける企業は、情報ネットワークを活用していることを理解することができる。</p>	1
調べる	<p>・調べ学習では、自作の副読本とタブレットを活用して小グループで行う。</p>  <p>○商品発注には、『単品管理』『POSレジスター』などのシステムでビッグデータを活用していることを理解する。</p> <p>○商品開発では、『チームMD（マーチャ</p>	<p>・資料やタブレットを活用して、グループで声をかけながら調べ学習を進めていく。</p>  <p>・コンビニエンスストアでは、商品の発注や開発・アプリなど、ビッグデータを収集するために情報ネットワークが活用されて</p>	5

	<p>ンダイジング)』を行い、1つの商品を発売するまでに、各分野のスペシャリストが独自に市場調査を行い、客のニーズに応える商品を開発している。</p> <p>○アプリの導入について、本部の方にインタビューした動画から店側と客側の双方のメリットについて理解する。</p> <p>○コンビニエンスストアにある ATM やマルチコピー機に、どのような機能があるのか調べる。</p> <p>○ゲストティーチャーとして、セブンイレブンの方に調べ学習で疑問に思ったことを質問する。</p>	<p>いることに気付く。</p> <p><商品管理> 単品管理 POS レジスター</p> <p><商品開発> チーム MD 地域ごとの商品</p> <p><アプリ> ビッグデータの収集 バッジ</p>  <p><その他の情報機器> マルチコピー機 銀行 ATM</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調べて疑問に思ったことを質問して、理解を深める。 ・情報ネットワークを活用して、ビッグデータを収集することで客のニーズに応えていることを理解する。 	
<p>確かめる</p>	<p>○『商品発注』『商品開発』『アプリの導入』『その他の情報機器』の項目ごとにフィッシュボーンにまとめて可視化する。</p>  <p>○個人→小グループ→全体の順に考えを広げていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・調べた内容とゲストティーチャーの話を基にフィッシュボーンにまとめ、グループや学級で考えを共有する。 	<p>1</p>
<p>まとめる</p>	<p>○コンビニエンスストアで活用されている情報ネットワークについてのまとめを書く。</p> <p>コンビニエンスストアでは、情報ネットワークの活用してビッグデータを集め、商品の発注や開発に役立てている。そして、私たちがほしい物が買えるようにしている。</p> <p>○学習の感想を書く。</p>		<p>1</p>

9 授業の様子

「つかむ」の過程 ～自ら追究する課題の設定～

(1) コンビニエンスストアの店内の写真の提示 (A店とB店の比較)



富里小学校の学区内にあるコンビニエンスストアの写真だよ。野菜が置いてあるね。富里産の野菜みたい。新鮮なんだよ。

他にはお菓子もあるね。お菓子はたくさんある。小学生がいるからじゃないかな。小学生が多い分お菓子が多いんだよ。



こっちの店にはキュウリの一本付けが置いてある。さっきの店と違うね。

コンビニって夏になると家族みんなのできるように必ず花火が置いてあるよね。

必ずではないよ。

同じ物も置いてあるね。でも、飲み物の機械はB店にしかないよ。なんでだろう。

(2) 発問から思考の揺さぶり

発：なぜ同じコンビニなのに置いているものが違うのか。他のお店に負けないようにしているからだと思うという意見や、お客さんのニーズに応じているのではないかと意見が出ました。



どんな人が買う人のかを考えているからだと思う。あと、季節に合わせておいているからじゃないかな。



(3) 課題を見出す

新たな情報（店舗数と売り上げ）の提示から、課題を見出し学習問題をたてる。

コンビニエンスストアでは、どうやって商品の種類や数を決めているのかな。何から調べているんだろう。

コンビニエンスストアでは、情報ネットワークがどのように活用されているのだろうか。



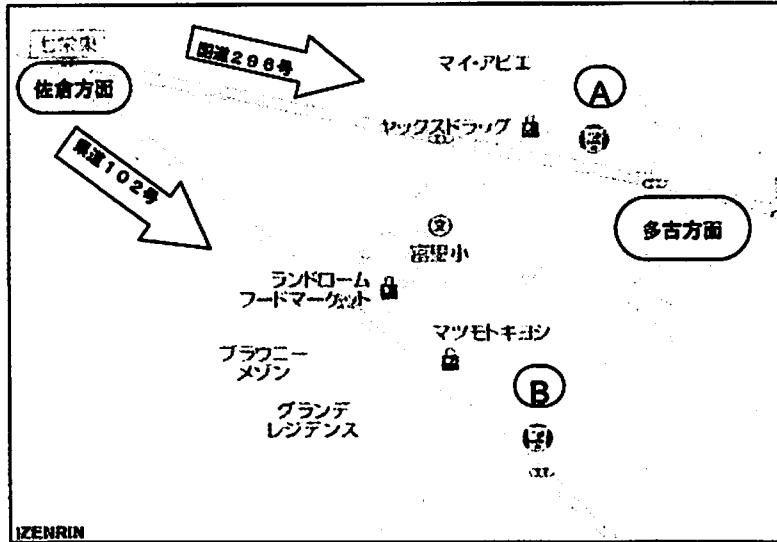
10 仮説の検証

【仮説1】

地域と関わりのある販売店を教材化することで、自らの課題をみだし、考えをもちながら学習を進めることができるだろう。

【検証1】

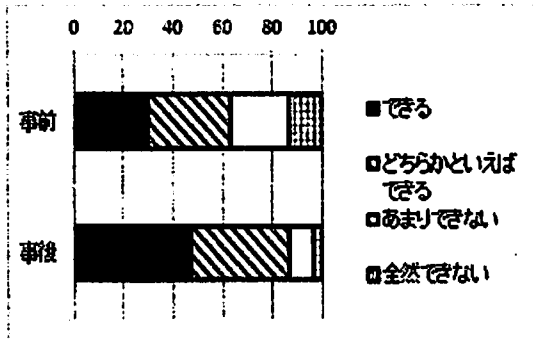
手立て1 学区内のコンビニエンスストアの比較



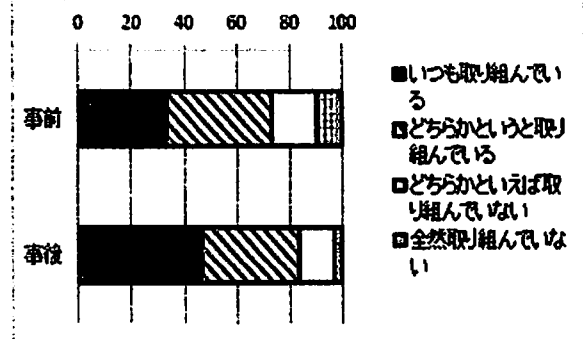
A店…国道296号線に面しており、車の通りが多く駐車場も大きいため、大型車の駐車スペースも多い。大人の来客を意識した商品発注をしている。
B店…県道102号線に面している。車の通りは国道296号線程多くない。本校児童の4割が通学路として通行している。子どもや家族連れの手来客を見込んで、駄菓子やキャラクターの商品を重点的に発注している。2店舗を比較する際に、冒

頭にA店・B店では、どちらに買い物に行く機会が多いか問うと、B店が多かった。

社会科の学習は、自分のこととして考えることができますか。



調べ学習に進んで取り組んでいますか。



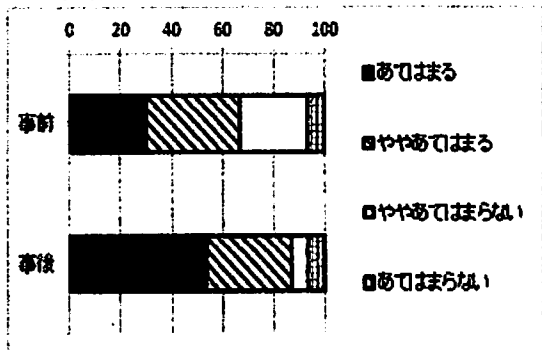
上記のグラフの結果より、学区内の2店舗を比較することで自分事として考えることができた児童が増えた。こんなに身近で情報ネットワークが活用されていることを知り、本単元への児童の意欲が高まって調べ学習の取り組みを促したと考える。また、調べ学習に意欲的に取り組んでいない児童が27%もいたが、グループで調べ学習を行うことでノートにまとめる内容を相談するなどして、事後のアンケートでは、調べ学習に意欲的に取り組める児童が大幅に増えた。

<導入時に出た児童からの課題>

- ①店によって置いている商品に違いがあるのは何でだろう。
- ②旅行で行った、県外のコンビニエンスストアには、千葉では売っていない商品があったのは何でだろう。
- ③どうやって商品の種類や数を決めているのだろう。

手立て2 ゲストティーチャーや指導者自作の副読本の活用

関係者に話を聞きたいですか。



調べ学習を進めていくうちに、コンビニエンスストアが以前より導入している電子マネーとアプリが同じではないかという疑問が出てきた。そこで、実際に働く人に来てもらいアプリの導入の経緯を話してもらった。

「現在、全国2万店のコンビニエンスストアで1日平均約1000人のお客様が来店して、電子マネーを使用する人が4分の1程度だから、残りの4分の3のお客様がどんな商品を購入しているかをつかめていない。その部分を補うためのアプリ導入で、電子マネーとアプリの同時展開でビッグデータの収集をねらいとしている。そして、お客様個人とつながるコミュニケーションになるように、一人一人に合った情報を配信している。」という話をしてもらった。

児童は資料だけでは分からない情報を聞くことができ、ビッグデータの収集をするためにコンビニエンスストアが行っている努力を知ることができた。事後のアンケートを見ても、関係者の話を聞いたことで、学習に対する意欲が高まったことが考察できた。

また、指導者自作の副読本を活用することで、何を調べてよいか分からないという児童が皆無だった。導入時にもった児童の疑問は全員が解決することができた。

- ①店によって置いている商品に違いがあるのは何でだろう。
- ②旅行で県外に行ったときに、千葉県にない商品があったのは何でだろう。

店に来るお客がちがうから、置いてある商品にもちがいがあるとね。

- ③どのように商品の種類や数を決めているのか。

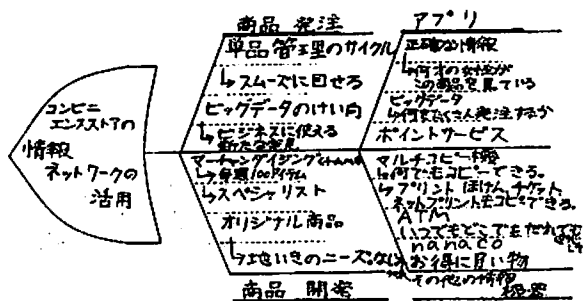
情報が全国2万店と同時に変化する。そのようなビッグデータを活用することで、店ごとの発注の種類や数などを見通すことができるそうです。

セブンイレブンでは、全国をエリアに分かつて地いきの商品開発に取り組み、地いきのニーズに対応。地いき特有の食文化や、なじみの味に合わせた商品を販売します。

【仮説2】

思考ツールを用いることで情報や考えを可視化でき、思考を整理することができるだろう。

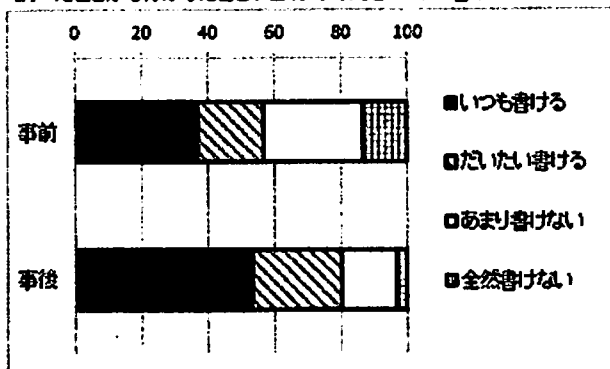
【検証】



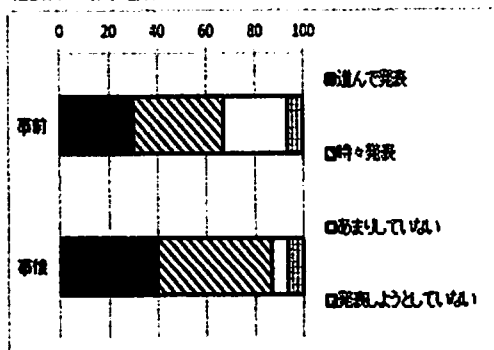
商品発注では、単品管理のサイクルがあり、それがあると、スムーズに発注をしたりすることができます。そして、2017年、ビッグデータを活用して、レギュレーションにやりとりすることができるようになった。そのビッグデータのけい向をつかむことで、新たな発見を入手することができる。

確かめる活動では、コンビニエンスストアで扱う情報を整理することができて、まとめる活動にスムーズにつながった。

調べたことから分かったことや自分の考えをノートに書けますか。



社会科の時間、自分の考えを進んで発表しようとしていますか。



上記の結果から、調べたことから分かったことや自分の考えを書けると答えた児童が、57%から80%に上がった。また、自分の考えを発表しようとする児童も67%から87%に上がった。これは、思考ツールを使うことでコンビニエンスストアで扱う情報について整理ができ、自分の考えをもつことができたと考えられる。

1.1 成果と課題

(1) 成果

- ・身近な教材として、地域のコンビニエンスストアの比較を取り入れたことで、児童自身が課題をみいだすことができた。
- ・地域の素材を教材としたことで、調べ活動にも意欲的に取り組むことができた。また、調べた事を自分の言葉で全員がノートにまとめることができた。
- ・今回の授業を行うことで、情報ネットワークの活用で自分たちのほしい商品があることが実感できた。

(2) 課題

- ・使われている言葉が難しく理解しきれない児童も見られた。そのため、情報が活用されることで、自分たちの生活がより豊かになっているということや様々なところで情報が活用されているということまでは理解が及ばない児童が見られた。
- ・今回の研究では、自ら課題を設定し追究するに留まってしまい、そこから、選択・判断し、表現するにまでは至らなかった。今後は、児童が選択判断する場を設けること、学んだことを基にして表現する場を設定することが必要である。
- ・情報については、かなり専門的な内容もあり、どこまでを子どもに与えて良いのか取捨選択が難しかった。情報の活用については、まずは教師側が何を取り上げどこまでを考えさせていけば良いかをより追究していく必要があると感じた。

第68次印旛地区教育研究集会
(社会科教育・小学校)

自ら課題を見だし、考え・表現する力を育てる社会科学習の在り方

～第3学年「農家の仕事」地域との関わりを生かした梨作りの仕事を通して～



白井市立白井第三小学校

中野 一生

森田 梨花

はじめに

本校は、昨年度創立40周年を迎えた学校である。白井市の西の端に位置し、鎌ヶ谷市と接している。学校の周辺は、杉や檜の林や、梨畑、野菜畑などに囲まれていたが、ここ10年ほどで、宅地造営が進み、多くの梨畑が姿を消してしまった。戸建てが増え、人口が増加し、本校の全校児童数は、700人を超えている。

児童の多くは、白井市の特産品は梨であることを知っており、梨を食べるのが大好きである。また、家が梨農家という児童もいる。しかし、梨畑がこの10年程で、かなり減ってしまったことや、梨の花がどのようなものか、いつ咲くか、どのように梨を作るか等は、知らない児童が多い。梨は身近にあるが、梨について詳しいことは知らないというのが現状である。

今回、梨作りの学習をすることで、児童にとって梨をもっと身近な存在とし、また、梨作りが抱える問題点を把握し、その解決策を考えることで、梨作りや白井市に誇りをもって欲しいと考え、本研究の実践に至った。

1. 研究主題

自ら課題を見だし、考え・表現する力を育てる社会科学習の在り方
～第3学年「農家の仕事」地域との関わりを生かした梨作りの仕事を通して～

2. 主題設定の理由

(1) 学習指導要領から

本単元では、学習指導要領第3学年の目標(2)(3)

- (2) 社会的事象の特色や相互の関連、意味を考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力、考えたことや選択・判断したことを表現する力を養う。
- (3) 社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を養う。

学習指導要領第3学年内容(2)

- (2) 地域に見られる生産や販売の仕事について、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
- イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。
- (ア) 仕事の種類や産地の分布、仕事の工程などに着目して、生産に携わっている人々の仕事の様子を捉え、地域の人々の生活との関連を考え、表現すること。

を受けて設定した。

本単元では、地域には農作物生産の仕事があり、自分たちの生活を支えていることについて学習する。また、このような仕事に見られる問題点を把握し、問題点を解決するにはどうしたらよいか考え、表現する力を養う。

白井市の大地は水はけがよく、梨栽培に適しているため明治時代から梨作りが始まった。白井市は日本国内でも有数の梨の栽培面積を有し、学校周辺にもたくさんの梨畑がある。しかし、最近では高齢化により梨農家の担い手が少なくなってきており、梨畑を縮小したり宅地にしたる農家が増えている。

このような現状の中で、梨栽培をはじめとする農業を営む人々は様々な工夫をし、白井市としても、農業を振興するために農家への支援や農地の有効利用・地産地消の推進といった取り組みがみられる。

そこで本単元では、学校のすぐ隣にある梨農家に協力していただきながら、農家の仕事について学習し、地域性を踏まえた梨作りについて自分たちの生活との関わりを考えることができるようにさせていく。

この学習を通して、社会と自分とのつながりを意識し問題や課題に気付かせ、それらを解決させることで、自ら課題を見だし、考え・表現する力を育成していく。

(2) 印教研研究主題から

よりよい社会の実現に寄与する「生きる力」を培う社会科学習
～自ら課題をみだし、自らの考えを実現できる児童生徒の育成をめざして～

印教研研究主題にある「自ら課題を見だし、自らの考えを実現できる児童」とは、基礎的な学習内容を身に付けた児童が、その知識を生かし、さらに深く学習を進めることができる児童の姿と考える。

そこで本研究では、梨作りの基本的な知識を身に付けた上で、学習過程の「ひろげる」に進む。そこで、市役所の方の話や資料から、梨農家の抱えている問題点に気づき、その問題点を解決するにはどうしたら良いか考え、話し合い、解決策を導き出す。そして、それを様々な人たちに聞いてもらう活動を行う。

このような学習活動が、まさしく「自ら課題を見だし、自らの考えを実現できる児童の育成」につながるであろうと考え、本研究主題を設定した。

(3) 先行研究より

本実践は、第66次印旛地区教育研究集会 印西市立宗像小学校 大川 征人氏の先行研究を、参考とした。大川氏は、課題として、「調べる」の課程において、それぞれの児童が取材に行けるような実践体制ができれば、さらに主体的な学習ができるようになる。「ひろげる」の課程において、発表会で、お世話になった農家の方を招待して、学習した成果を発表することができれば、さらに思考力・表現力の向上を図ることができたのではないかと考えていた。

そこで、本実践ではこの2点も踏まえて実践していく。

(4) 児童の実態より

本学級の児童28名は、社会科が好きな児童が多い。3年生の学区の探検やスーパーマーケットの学習などの見学を通して課題解決していく学習が多かったためと思われる。学習方法も見学や体験を好きな理由として挙げている。他にはグループや全体での話し合い、自分の意見と友達の意見を交流することも好んでいる。

農業に関しては、学校近隣の畑をよく目にしているものの、その仕事についての関心は少なかった。梨に関しても、梨が白井の特産品であり、とてもおいしいということはみんな知って

いる。また、直売所が多いこともあり、直売所の梨畑に入ったことがある児童は多いが、梨をどのように作っているか、どのように売っているか、どのような問題点を抱えているかということに関しては、考えたことがない児童が多い。

このような児童の実態から、まず、梨作りについて学習していくことを通して、児童に梨作りとはどのようなものかを学ばせ、梨作りに愛着をもたせたい。そこからさらに梨作りの問題点を自分たちで気づき、その問題点の解決方法を考え、市役所や梨農家、保護者に発表するということを通して、児童に社会的な思考力や判断力・表現力を育てたいと考え、本研究主題を設定した。

3. 主題について

「自ら課題を見いだし考える」とは…

子供たちは、農業についてあまり関心をもっていなかった。その子供たちに興味・関心をもたせるには、①実際に何度も梨畑に足を運ぶこと②直接農家の方から色々な話（作り方の工夫、苦労話等）を聞くことを通して、今まで近くて遠い存在だった梨作りを身近なものにすることが大切だと考えた。そして、さらに梨作りについて真剣に考えさせるために、今まで学習してきたことや、市役所の職員の方からの話を聞いて、梨作りの課題を自分たちで気づき、その解決策を自分たちで協力して考える場を設定した。

このような活動を通して、社会的な思考力・判断力が身に付くものと考えた。

「表現力を育てる」とは…

自分の考えを、相手にわかりやすく伝えるということは、これからますます必要とされる力である。そのような力を養う一環として、①子供たち同士で発表を聞き合い意見交換する②農家と市役所の方々に発表し、アドバイスを頂く③保護者の方々に発表し、感想や質問をして頂く、という3回にわたる発表の場を設けた。このように発表を聞いてもらう方が変わる中で、子供たちはモチベーションを切らすことなく、新たなやる気をもって発表に臨むことができると考えた。また、異なる立場の方々に発表することで、発表の仕方を変えていかなければいけないこと、より分かりやすく自分たちの意見を伝えるためにはどうしたらよいかを、思考し工夫することができるものと考えた。

このような場を設定することで、表現する力が伸びるものと考えた。

4. 研究の目標

梨作りの学習を通して、地元の農業に対し興味・関心、そして誇りをもたせること。また、梨作りが抱える問題点を把握し、その問題解決策を考え発表することにより、梨作りをより身近なものとして捉えさせ、社会的思考力・判断力・表現力を身に付けさせることができるかを目標とする。

5. 研究構造図

目指す児童像

- 地域の梨作りに関心をもち、農家の様々な工夫や努力について理解することができる子
- 白井市の梨作りについて学び、その問題点を把握し、問題点を解決するための方法、白井市の梨をもっと有名にするためのアイデアを考え、提案できる子

変容の願い

地域の梨作りに関心をもち、生産者の思いや願い、工夫に気付くことができる。

白井市の梨農家が抱える問題点に気付き、その解決策を意欲をもって考えることができる。

問題の解決策をまとめて分かりやすく発表することができる。

手立て

- ・白井第三小の子供たちにとって、梨の白い花は、校歌に歌われている大変身近な存在であるが、梨に関心を寄せる児童は少ない。そこで、梨が白井市の特産品である資料（千葉県の中で収穫量・栽培面積が第1位、なし坊等）を提示し、梨に興味関心をもたせる。
- ・梨がどのように作られているのか、農家の方から直接話を聞いたり、実際の仕事を見たり、副読本を使ったりして調べさせる。
- ・1年間継続して梨作りを見学することを通して、梨農家がおいしい梨を作るために行う工夫や努力、梨作りへの情熱、梨への愛情を感じ取らせる。
- ・農家の方の話や、梨作りの資料、なし坊からのメッセージを参考にして、今の梨農家が抱えている問題に気付かせる。
- ・問題を解決するにはどうしたらよいか、インターネットや市役所からもらってきた資料、保護者の意見等を参考に一人一人に考えさせ、意見をもたせる。
- ・一人一人が考えた意見を持ち寄り班内で意見をまとめさせる。
- ・調べたことや考えたこと、話し合っただけを資料にまとめ、子供同士、梨農家・市役所の方々、保護者や地域の方々に発表する場を設ける。

研究主題

自ら課題を見だし考え・表現する力を育てる社会科学習の在り方
～第3学年「農家の仕事」地域との関わりを生かした梨作りの仕事を通して～

主題を支える学力

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> ・地域社会の一員として地域の良さに気付き、地域に誇りをもてるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的資料を通して、地域社会の課題を把握し、その原因を探り、問題点の解決策を考えたり、調べたことや解決策を表現したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的資料を通して、必要な情報を調べまとめることができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域には、農作物の生産に関わる仕事があり、自分たちの生活を支えていることを理解できるようにする。

6. 研究仮説及び手立て

【仮説1】

身近な地域素材を教材化すれば、地域の特色を理解するとともに、地域の課題を身近な問題としてとらえ、社会的な思考力や判断力を育てることができるであろう。

手立て

- ①学校のすぐ隣にある梨農家に年4回訪問し、梨の作り方やおいしい梨を作る工夫・努力、どのように販売・出荷しているか等を、梨農家から直接話を聞けば、梨作りをより身近に感じ、梨作りへの興味関心が高まるとともに、社会的な思考力や判断力を育てることができるであろう。
- ②梨農家や市役所の方からの話や資料から、梨作りの課題を把握し、その課題を解決する場を設ければ、積極的に問題を解決するための方法を考え、社会的な思考力や判断力を育てることができるであろう。
- ③発表を聞いた方々から、自分たちの意見が認められたり、自分たちの意見が採用されたりすれば、社会的な思考力や判断力を育てることができるであろう。

【仮説2】

地域の特色や課題を、様々な人に向けて発表する場を設定すれば、分かりやすく説明することができ、社会的な表現力を育てることができるであろう。

手立て

- ④梨作りについての学習を続け、梨作りがより身近な存在になれば、梨作りの工夫や努力についてまとめたり、梨作りが抱える問題の解決策をより積極的に考えたりして、分かりやすく表現しようとし、社会的な表現力を育てることができるであろう。
- ⑤子供同士で発表を聞き合い、良かった点や、表現を変えた方が良いと思われる点を教え合えば、互いに発表方法を高め合い、社会的な表現力を育てることができるであろう。
- ⑥発表する対象者を変え、どのような人たちに発表するかを意識させれば、発表を聞く人たちに合わせた説明の仕方、表現を考えることができ、社会的な表現力を育てることができるであろう。

7. 研究の内容と方法

(1) 研究内容

- ア 地域素材を教材化し、学んだことから課題を見つけ、その解決策を考える学習活動による社会的な思考力や判断力の育成。
- イ 考えを深め合う話し合い活動や、対象者を変えた発表活動による、社会的な表現力の育成。

(2) 研究方法

- ア 社会的な思考力や判断力についての児童の変容（ワークシートの記述）
- イ 社会的な表現力についての児童の変容（ワークシートの記述，発表内容，掲示物）


8. 研究実践

(1) 単元名 「農家の仕事」

(2) 単元の目標

- 地域の農家の仕事の様子に関心を持ち，意欲的に調べている。
- 農家の仕事と自分たちの生活とのかかわりを考えようとする。
- 白井の梨を有名にするために自分に何ができるか考えようとする。
【社会的事象への関心・意欲・態度】
- 地域の農家の仕事の様子について，学習問題や予想，学習計画を考え，表現することができる。
- 農家の仕事の工夫を自分たちの生活と関連付けて考え，適切に表現することができる。
【社会的な思考・判断・表現】
- 観点に基づいて見学したりインタビューしたり，資料を活用したりして，農家の仕事の様子について必要な情報を読み取ることができる。
- 調べて分かったことをノートや発表資料等にまとめることができる。
【観察・資料活用の技能】
- 地域には農作物の生産にかかわる仕事があり，自分たちの生活を支えていることを理解することができる。
- 農家の仕事に見られる特色や他地域とのかかわりを理解することができる。
【社会的事象についての知識・理解】

(3) 単元計画（16時間扱い）

学習過程	○学習活動	期待する変容の姿
つ か む 1	○白井市で作られている農作物について知っていることを話し合う。 ○梨作りの様子の写真を見て話し合う。 ○梨作りについて気が付いたことや疑問に思ったことを話し合い，学習問題を作る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> ④おいしくて有名な白井のなしはどのように作られているのだろう。 </div>	・白井市の梨作りについて興味・関心をもつ。 
調 べ る 7	○学習の計画を立てる。 ○梨農家を見学する計画を立てる。 ○4月，5月，9月，1月の4回，梨作り農家である鶴ノ沢さんの畑を見学し，疑問に思ったこと，気が付いたことをまとめる。(手立て①) ○9月の見学を振り返り，新しい課題について	・4回にわたる梨農家への見学を通して，梨作りの苦勞，工夫，梨作りへの情熱に気付く。 ・梨農家の苦勞・工夫・情熱を知り，梨への誇り，愛着をもつ。

話し合い、学習課題を作る。

(課題) 収穫されたなしはどのように売られていくのだろうか。

○梨の取り入れと出荷について調べる。

- ・収穫された梨は、直売されたり、市場に出荷されたりして、市内だけでなく、近隣の市や日本全国に送られる。

(課題) 白井のなし作りにはどのような工夫があるのだろうか。

○これまでの見学から、農家での取り組みを調べる。

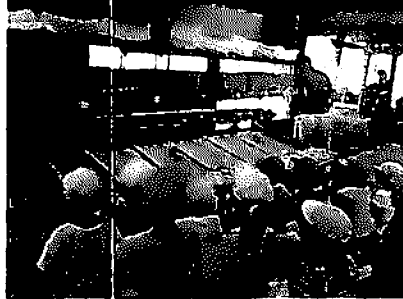
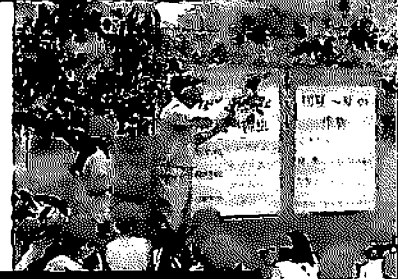
- ・梨農家では、おいしい梨をつくるために、自然条件を生かしたり、安全や効率を考えたりするなどの工夫をしている。

(課題) 農家では、1年間どのような仕事をしているのだろうか。

○梨を育てる1年間の仕事について分かったことや考えたことを話し合う。

- ・梨作り農家では、自然条件を生かし、季節に合わせた方法で栽培している。

・梨作りをより身近な存在として感じるようになる。



ま
と
め
る
1

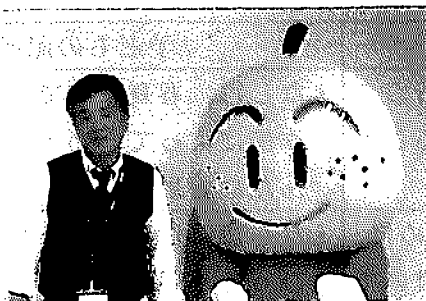
○学習問題について調べたことをまとめる。

㊦ 農家の人たちが、一年間季節にあった手入れを続けるとともに、たくさんの工夫や努力を続けることによって、白井のおいしいなしは作られている。

ひ
ろ
げ
る
7

○市役所の方からの白井市の梨作りについてのビデオレターを見る。

○調べたことをもとに白井市の梨作りの現状を知り、将来の梨作りについて自分たちの考えをもつ。(手立て②)



白井のなしをもっと有名にして、なしづくりをさかんにするにはどうすればよいだろうか。

・梨農家が抱える現状、問題点を理解し、その解決策を考えようとする意欲をもつ。

白井市の農地・農家数等の推移

区分	昭和62年	平成12年	平成27年
農家数	921戸	768戸	617戸
経営耕地面積	約1038ha	約868ha	約700ha
なし農家数	329戸	280戸	205戸
なし栽培面積	約308ha	約321ha	約260ha

○テーマごとに、自分たちの考えをまとめ、発表資料を作る。(手立て④)

○グループ同士で発表を見せ合い、意見交換を

・より説得力のある意見にするにはどうすれば良いか考える。

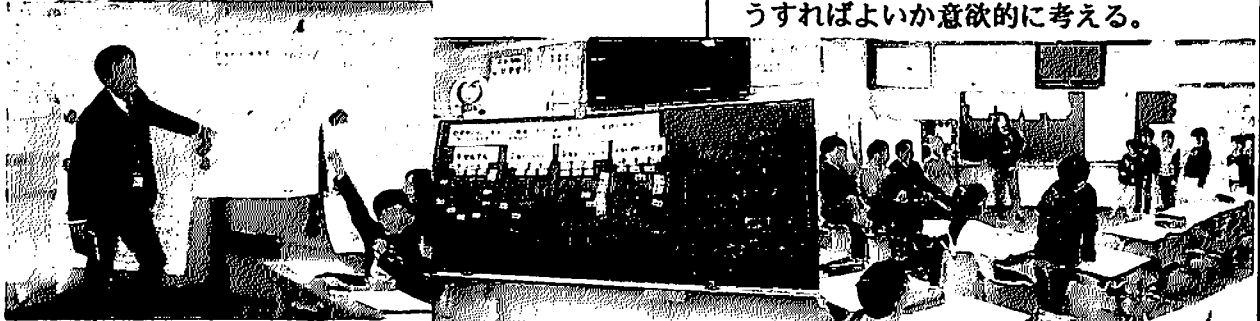
・発表の良い点は認め、足りない点を教え

する。 (手立て⑤) 合う。

白井のなしをもっと有名にするために考えたことを話し合おう。
(ぼくたちわたしたちが考えたことを市役所の方となし農家の方に聞いてもらおう！)

○梨農家の方・市役所の方に自分たちの考えを聞いてもらい意見をいただく。 (手立て③)

・自分たちの考えた意見がどう評価されたか理解し、さらに良い意見にするにはどうすればよいか意欲的に考える。



○梨農家の方・市役所の方からいただいた意見を元に次の保護者への発表の手直しを行う。

・さらに説得力のある意見にするにはどうすればよいか考え、資料を作り直す。

○保護者の方へ発表を行う。 (手立て⑥)



○白井の梨について分かったことや考えたことを新聞にまとめる。

・白井の梨に誇りをもち、今まで学んだことを新聞にまとめる。

9. 仮説の検証

(1) 仮説1

① 4月・5月・9月・1月と4回に分けて梨農家見学に行く。(手立て①)

○「白井市に梨作りの工夫や努力に気付くことができる。」評価基準(ワークシート)

評価	評価基準	子どもの記述内容
A 13人 48%	・梨農家では、季節にあった作業行うことにより、おいしい梨を栽培することができることに気付いている。	・なしは、春夏秋冬で仕事が変わる。 ・季節によって、いろいろな仕事になるんだなと思った。
B 10人 37%	・梨農家では、おいしい梨を作るために、色々な工夫をしていることに気付いている。	・なし農家はいろいろな工夫をされていてびっくりした。 ・なし農家はたくさん工夫をしている。
C 4人 15%	・梨農家が、おいしい梨を作るための作業は大変なことに気付いている。	・なし作りって大変なんだと思った。

② 10時間目『課題の解決策を考える』（手立て②）

○「梨作りの課題の解決策を考えることができる。」評価基準（ワークシート）

評価	評価基準	子どもの記述内容
A 14人 52%	<ul style="list-style-type: none"> ・梨作りの課題の解決策を書ける。 ・なぜその解決策を考えたのか、理由を書ける。 ・解決策の具体的な方法を書ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・なし農家の人が増えるように考えよう。 ・平成になって若いなし農家の人が、少なくなってきたから。 ・新しくなし作りを始める人に畑をプレゼントする。
B 8人 30%	<ul style="list-style-type: none"> ・梨作りの課題の解決策を書ける。 ・なぜその解決策を考えたのか、理由を書ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・白井のなしを世界中に広めよう。 ・白井のなしを外国に売れば、もっと有名になれるから。
C 5人 18%	<ul style="list-style-type: none"> ・梨作りの課題の解決策を書ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・なし作りの工夫。 ・なし農家の人が増えるように考える。 ・白井のなし宣伝。

【考察】

①の結果では、A・B評価に達した児童が85%で、これは、見学の回数を重ねるごとに、梨作りについて興味・関心が高まっていたことを示していると考えられる。最初は、いつ梨を農家からもらって食べることができるのか、ということを感じて書いていた児童がいたが、回数を重ねるごとにそのような感想はなくなった。また、ワークシートへの記入量も回を重ねるごとに増え、内容もねらいにそったものになっていった。

②の結果では、A・B評価が82%となった。この頃（10時間目）になるとほとんどの児童が、白井の梨に対して誇りや愛着をもつようになり、真剣に梨の将来について考えることができていた。解決策は、3年生が考えたにしては、すばらしいものが多かった。

このような成果が出たのは、やはり、年間4回梨農家に見学に行けたことが大きいと考える。年間を通して、梨農家の話を聞き、実際の作業を見続けることのすばらしさを再認識することができた。今後も、白井第三小学校として、この現地学習は続けていく必要があると考える。

（2）仮説2

③ 12時間目・13時間目・15時間目『発表し、意見や感想を聞く』（手立て④⑤⑥）

○「地域の特色や課題を、分かりやすく説明することができる。」評価基準（内容・掲示物・ワークシート）

評価	評価基準	子どもの記述内容・様子
A 6人 22%	<ul style="list-style-type: none"> ・市役所や農家の方、友達からアドバイスを受け、それを自分の意見に生かして、説明することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・なし研究所で、これからもっと新しい品種を作ったり、肥料を作ったりして欲しい。
B 17人 63%	<ul style="list-style-type: none"> ・市役所や農家の方、友達からアドバイスを受け、より分かりやすく説明することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・なしパークの資料を付け加えることにより、より分かりやすくなることが分かった。
C 4人 15%	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを、説明することができている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一生懸命発表することができた。

【考察】

③の活動では、児童が互いの発表を見て、アドバイスし合ったり、市役所や梨農家の方のアドバイスを受けたりすることにより、より分かりやすく説明する方向に向かう児童が増えた。例えば、具体的な資料を付け加えたり、実際に歌を作って発表に付け加えたり、自分の意見に理由を付けて発表したりする児童やグループが増えた。その中で、A評価の児童は、アドバイスを自分の意見に取り入れ、さらに自分の意見を高めることができた児童である。全体的に見ると、85%に児童が自分の意見をよりよくしようと活動できたことが分かった。

3年生の児童は、一般的に自分の意見が一番と思う傾向がある。しかし、市役所や梨農家の方、保護者に自分たちの意見を伝えるという目的意識をもたせたことで、友達の意見を散り入れたるより良くしようとする児童が増えたようである。

10. 成果と課題

〈成果〉

- ・学習を始める前、児童には、梨はおいしい大好きな食べ物という意識が強かったが、年4回の梨畑見学で、梨農家の生の声、実際の作業を見ることで、梨は、自分たちの身近にある誇るべきものという意識が強くなった。
- ・自分たちが普段何気なく食べている梨が、実は、農家の人たちの努力と工夫、熱意によって作られていること。また、梨は、簡単に作れるわけではなく、1年間のいろいろな作業を通して初めて実を結ぶこと。を実感を伴って理解することができた。
- ・子供たちの大好きな梨を教材化し、まず、梨作りを学び、梨を子供たちにとって身近な存在にし、「ひろげる」の過程で『白井のなしをもっと有名にしてなしづくりをさかんにするにはどうすればよいだろうか』という課題を子供たちに投げかけることにより、子供たちの学習意欲を高め、社会的な思考力判断力を育てることができた。
- ・アドバイスし合うことにより、新たに自分たちで資料を作ったり、歌を作ったりするグループがあらわれ、よりよい表現方法へ向けての工夫が見られた。
- ・発表する対象者を変えながら、複数回発表の場を設けたことにより、子供たちの意欲は継続し、社会的な表現力を伸ばすことができた。
- ・市役所の方や、梨農家の方に、自分たちの考えたことが評価されることのより、さらに良いものを考えたい、梨作りを手伝いたいという意欲をもつ児童が多かった。

〈課題〉

- ・梨農家見学は、4月から始まるため、最初は資料作りや打ち合わせ等、準備不足のまま見学を行うことになった。このことを生かして、今年度は担当学年との引き継ぎをスムーズに行うよう気をつけて実施した。
- ・児童の問題意識をさらに高めるような、ワークシートの改善に取り組んでいきたい。
- ・友達や他者からの助言を生かした社会的な表現力の向上を目指せるように今後も継続した指導を行っていきたい。